
ボクっ子 + ネコミミ = 変態

白鳥準

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボクっ子 + ネコミミニ変態

【Nコード】

N0500E

【作者名】

白鳥準

【あらすじ】

いわゆるモテそうになかったであろう主人公がひよんなことから変な先輩に好かれ、その貞操を守るために奮闘する真正正銘の戦記である。ボクっ子とかネコミミとかメイドとか、そんなものはどうでもいいからこの人を止めてくれ……謝礼金？代わりにこの人やるよ。

0、告白？ いいえ、ケフィアです。（前書き）

後書き参照。

ちなみに今の心情を表すと、某歌詞より、「手ごろな紐と、手ごろな台を都合よく見つけた」ってところですよ。

0、告白？ いいえ、ケファイアです。

「はるくん……ダイスキだよ」

甘い声が俺の脳を溶かす。そのふつくらとした唇から発せられた言葉はまるで魔法のようで、ぶっちゃけ死にそうだった。

突然だが俺は猛烈に冷たい汗を流している。ハンカチ持ってきかなかとか考えてる暇が本気でない。今思考すべき点は一点、現状をどう回避して全力疾走で逃げるかだ。右左も確認したいが残念ながら体育館裏とかいう今の世の中滅多にお目にかかれない場なので全く意味を成さない。強いて言うならば後方に壁があることくらい。やっべ、バスケがやりたいです。

短絡的に言ってしまうならば告白を受けていた。勿論男性からではなく女性から。しかもクソみたいに美少女な人に。髪の毛とかさらさらで肌とかさらさらで手とかさらさらで目とかさらさらで有り得ないけど、どう考えても自分と不釣り合いな人間が目の前に立っている。毎日その女神さながらの華奢な手で梳かれているであろう漆黒のロングヘアに、花柄の髪飾りが一つ。フランス人形と表現するよりはコットン百パーセントの手触りが期待できそうな日焼けの無い真っ白な肌。学校指定の制服に包まれたプロポーシオンは外観でも分かるほどにスタイルが良い。そしてこの近距離で微かに香る香水類かはたまた他の何かか、俺にとっては未知の香りが俺の脳を酔わす。

だがそんなことよりも恐ろしいのがこの身長だ。俺は俗に言う『ロリコン』という奴ではないが、この百五十台前半であろう小ささには小動物的な愛くるしさを覚えられずにはいられない。あ、頭なでなでしてえ……。

そんな絶妙な位置からの上目遣い。しかもすげえ熱い視線を送られる形で。そのくるくるした愛らしい瞳とか凄い潤んです。いつ

からコンタクトレンズ入れたんですか。

実はこの目の前の女性が同じ学校の先輩だったりするわけなのだが、今考えれば言うところの『フラグ』って奴は乱立してたんだろ。二千本くらい。しかも同じ位置に。

まあ少し冷静になって考えてみようぜブラザー。いつどこでそんなフラグが立ったんだ。昨日好きって言われたところか？ それとも一昨日好きって言われたところか？ もしかしたら一週間前に好きって言われたところかな？ なんだよ、全然立ってないじゃんフラグ。主に俺の生存フラグとか。

ダメだ、脳内が満員電車さながら有り得ないことになってやがる。そこっ、紛れて痴漢とかしてんじゃねーよ。さらに荒れるだろうが。と、ここで俺は現実逃避を一度止めて現状を再び理解しようとする。告白されてます。以上忘れ物はありません。把握した、よって逃げ道無し。男なら当たって破碎しろ。

「準先輩、本気ですか、それ」

乾いた雑巾を絞って出たような声で俺はそう先輩に言った。実際カラカラだったろう。今ならあまり好きじゃない黒飴舐められそうな気がする。汗の味にまみれてるだろうし。

「はる君は……ボクのこと、嫌い？」

先輩はそう言うと、ツツツツ、と俺のへそ部分をなぞって来る。止めてください、何か生まれそう。あとその熱い吐息は何ですか。物凄い危険な臭いがするんですけど、淫靡って意味合いを含めて。

「き、嫌いじゃないですけど、いつにも増しておかしいですよ準先輩……」

「だって、はる君がイケナイんだよ？ こんなに、こんなにボクを

待たせて……」

そういうと先輩はほのかに紅潮した顔を俺に向けて、ベルトに手をかけてきた。いやいや待てよ、気が早いなんてレベルの騒ぎじゃないでしょうそれは。俺は全力でその手を止めにかかるが、どこから出るのか、恐ろしい力で跳ね返される。指掴まないで下さい、折れますきつと。

「ま、待ってください。酔ってるんですか？ 酔ってるんでしょう？」

「ふふふ、勿論はるくに酔ってますよ」

「いやいやいや、そういうこと言ってるんじゃないって分かるでしょう！」

「え？？ ボクには何にも聞こえない」

ダメだこいつ……なんとかしないと。

この先輩、一体俺のどこのナニを気に入ったのか知らないが、何かを境に急に接近してくるようになったのだ。最初は俺もこんな可愛い先輩に好かれるなんてついに俺にも春の風がやってきたかとも思ったが、まあ二日三日もすればこの人の性格が分かってくる。

単純明快に言えば、変態。勿論性的な意味で。

人の欲求ピラミッドの第一次欲求に性欲が含まれているとさえども、人それをコントロールすることが可能なのだ。食欲、便意、睡眠欲は無理でも、性欲は出来るはずなのだ。

そしてそれが出来ないのがこの先輩である。んでもって、それに好かれる俺。俺も嫌いなわけではないのだが……な？ 色々あるだろ、青年には。

非常にまずい。このままではこの一ヶ月間苦悩に苦悩を重ねて守ってきた貞操が失われかねない。ここは心を鬼にして接せねばならない。

そう決意して、俺は先輩の肩の上に手を置いた。

「きゃっ！？ な、何？」

今から言う言葉は重い、重い一言だ。場合によっては先輩を傷つけるかもしれないほどの重さを持っている言葉だ。軽い気持ちで言うてはいけない言葉だが、時と場合によるならば使う場所は今しか無いだろう。

俺は大きく息を吸い、射抜くような視線で先輩を見つめて言った。

「先輩……俺、ネコミミ萌えなんだ」

ああ、なんと甘美の響き……。万歳ネコミミ。ちなみに今の発言の十割が嘘でできています。

先輩が豆鉄砲を食らったように飛び跳ねる。心底驚いているようだ。その綺麗な瞳が右往左往、行き場をなくしてさまよっている。

それもそうだろう。この準先輩こと白鳥準しらとりじゅんは、生粋のネコアレルギーなのだ。以前俺に「何萌え？ 何萌えなのはるくんは？」としっかりと聞いてきて、「メイド萌えですよ」と適当に答えたら狂喜乱舞で安堵。変な表現だが、俺が見た感想で言えばそんな感じだ。

その後、何故そんな質問をしたのかと聞いたらお茶を濁されたので、色々調べて見たらこうだ。

「そ、そんな、嘘だよな？」

嘘だが本当ですと答えておく。

ご覧の通り、準先輩はネコミミ属性すら嫌っている。

アホらしい話だと思っただが、文化祭のメイド喫茶に連れて行ってもらったことがあり、その際にメイドの一人がネコミミを装着していたのだが、準先輩はそれをむしりとって外に放り投げ、数十分

に渡ってその女子生徒に説教していたことがある。ちなみにその間は俺は放置。コーヒーの味を十二分に楽しめた。

まあそんなこんなで準先輩の弱点を知ったわけだが、鬼畜でもいじめっ子でもなんでもない俺として人様の苦手なものを会話に出すのは気が引けたわけなのだ。

だが、ここまで来てはもう使わざるを得ない。許せ、準先輩。俺は貴女の同志だ。いざこざが解れたら一緒にネコミミ撲滅委員会作りましょう。

と、その時、準先輩から今にも消えそうな小さな嗚咽が聞こえた。

「うっ……ひつく……」

「え。ちよっと、何泣いてるんですか準先輩……」

「だって、だって、はるくん、メイド好きだって言ってたじゃない！！」

「いやそれはその、いわゆるきりんさんより象さんのほうがもっと好きです的な……」

「それよりもボクのほうがもっと好きでしょ！？」

ええ……。その問いはいささか無理があるんじゃないかと。

何故だかその切羽詰る勢いに押されて言葉が出なくなる。

「何か言ったらどうなの！？」

「いや……その……」

俺、なんで怒られてるんでしょうか。つかこれ告白の現場じゃないでしょうきつと。

「うっ……うわーん！！ はるくんの馬鹿あー！！！」

その瞳に涙を溜め切れなかった準先輩は、身を翻して走り去って

しまった。声をかけることも出来ずに呆然とする俺。こ、後悔なんてしてないんだからねっ!?

ともかくにも、そんな感じで俺の貞操防衛戦は幕を閉じた……
とっていた時期が僕にもあつたんです。

ともかくにも、そんな感じで俺の貞操防衛戦は幕を開けた……
マジで。

0、告白？ いいえ、ケフィアです。（後書き）

いいえ、私は蜻蛉ではありません。あなたが見ているのはきつと他の誰かでしょう。蜻蛉です。

伝説を築いてみせる！と意気込んでスタートラインで転びました。しかしそれでも走り続けるのが私です。

セルフディストラクションとかそんなのかんげえねえ！と言いたいのですが、些か心配事が多すぎて（ry

今後のために言っておきますと、この作品はいずれ間違ひなく削除され……るつもりだったんですが、要望と、意外な出来によってやめました。催促してくださったかたがたにお礼を言います。友人に送るプレゼールであり、自己満足であり、いわゆる「美少女描写」の勉強のため、と言いながら「僕の趣味です」と胸を張っていえるようになるための修行です。いや、違いますけどね。

では、速筆してさっさと死にます。

1、路上の変態は見てみぬふりをせよ(前書き)

後書き参照。

今の心情を表すと、「俺、これが終わったら結婚するんだ」という感じ。

1、路上の変態は見てみぬふりをせよ

ランニングインザスカイ。あ、間違えた。

走り抜きたいほどの青空の下、俺は何の変哲も無い道路を全力疾走していた。理由など言わずもがな、俺が逃走者だからだ。

「待つてよはるきゅん!!」

きめえよ。誰だよはるきゅんつて。

後方の追い手はこれもまた言わずもがな、準先輩こと白鳥準。まさか早朝からガキみたいな鬼ごっこをするとは思わなかった。

普段も毎朝準先輩は俺のことを待ち伏せしている。別段迷惑というわけではない。むしろ初めの頃は嬉しかったくらいだ。いや、待つていてくれること自体は今でも嬉しいのだが。

しかし今回は逃げざるを得ない。ああもう全力で逃げなければならぬ。貞操とかそういう次元を超えて人間としての尊厳とかその他色々を失いそうな気がする。今の準先輩はそれほど危険な人物と化していた。動く実害スプリンクラー。しかも一点にしか振り撒かない不良品です。さっさと廃棄処分して。

「見て見てー！ これ見てー！」

「無理！ 断じて見ません！」

「なんでよ〜！」

「何かを間違えそうな気がするんです！ 猛烈に！」

死ぬぜえ、準先輩の姿を見た奴はみんな死んじまうぞおとか、どこぞの死神が俺に語りかけている。ありがとつ、今回限りは死神にも感謝したい。

だがこの状況において一つだけ問題があった。

それはつまるところ、俺が運動不足の現代人で、準先輩がテニス、バスケ、ソフトなどなど、多数の部活に兼部しているスポーツにおいて完ぺき超人だということだ。その無駄の無いプロポーションはここから来ているのだろう。まるで風を味方につけたかのような疾走。普段は憧れるものだが、今だけ恨みたい。

「……………に、逃げ切れん……………」

息が上がってきた。足が重く、思うように前に出てくれない。流石に全力疾走ではいつもより長くもたない。

後ろを振り向きたい衝動に駆られるが、ここは必死に前だけを見据えて明るい未来を……………。

「はるきゅ〜ん!!」

「じはあっ!?!」

背中への強烈な衝撃に耐え切れず俺は無残にもアスファルトの上に顔面を打ちつけた。ああ、憧れのマイホーム、何故そんなに遠くに行ってしまったのだ。

新たにアメリカンフットボールの技術を習得した準先輩が背中の上から強い力で抱きついてくる。倒れている俺は成されるがまま、正面からで無かったことだけに感謝したい。当たってるんですよ、その豊富なものとかスカートの奥のものとか。いや、当ててるんですよけど。

「んふふ〜。はるくんの背中あつたかいなあ〜」

「そいつは重畳……………。とりあえず色々辛いんでどいてもらえませんか。もう逃げませんから」

「いやー。このままにいるー」

頬擦りしないで。ぞくぞくつて来るんですそれ。

「あ、はるくん、顔怪我してる……」

準先輩が先ほどアスファルトとごつつんこした顔に出来た軽い擦り傷を見つける。ちなみに準先輩から見えていないあご周辺は物凄い怪我なんです。早く保健室に行きたい。

「ボクが舐めて治してあげる！」

「え？」

そういつと準先輩は、その小ぶりな唇をこちらに近付けてきた。

その花弁から微かに聞こえる吐息の熱を耳元で感じる。準先輩が状態を上にならず度に制服と制服が擦れ合う。背中から感じる準先輩の体温が、俺の身体をも熱くする。

その唇から真つ赤な舌がぬめり、と姿を現した。

そして、ぴちゃっ、と俺の頬に生暖かいそれが触れた。

「うっ……おおお！！！」

寒気がっ、寒気がっ！

「んっ……はあ……っ、れるお、ちゅ」

そんな俺の気も知らず、準先輩は傷口を中心に俺の顔を舐めまわす。ねっとりとした感触が絡みつき、準先輩の唾液の軌跡が俺の頬に残る。何度も往復するように舌を使い、丹念に傷口を消毒して行く。

「んむ……んっ、はあっ」

準先輩の瞳の奥に確かな熱さを感じる。吐息が時折荒くなり、先輩はどうやら行為に熱中しているようだ。俺の頬を走る濡れた感触も次第にいたわるようなものから、攻めるようなものへと変わっていった。

「ああっ、好き、大好きだよ、はるくん……」

まずい、耳元で語りかけられるように呟く言葉が俺の脳内を痺れさせる。そんなにストレートな言葉で表現されると、俺もたまったものではない。自然と身体が硬直して、その行為を受け入れるがままになっていた。

「はるくんの肌も血も声も良いよ……全部ボクのもの。ああっ、今すぐ食べちゃいたい」

……それはまずいな。

ふと感覚を全身に戻してみると、なにやら太股周辺に不穏な空気。蛇のように絡みつく手の平が俺の上で踊っている。

それは段々と内股に移動していき、

「って待たんかいこら。何しようとしてるんですか」

「エッチ」

素直だなあオイ！

念のために一応状況をもう一度確認させてもらうと、現在時刻は全国の学生が舗装された道路の上を安全に友人と談笑しながら歩いている時間帯であり、通勤途中のサラリーマンや犬の散歩をする婦人方を多く見かける。

場所はその通学路。単刀直入に言えば、この状況から目を逸らせ

ば周りにギャラリイがいるような場所であり、今の発言はすべて公にさらされたわけだ。

「あらやだわあ、若いからってこんなところで」「お母さん、あのねーちゃんたち何してるの?」「しっ! 見てはいけません!」「はっはっはー、俺も昔は路上でハッスルしたもんだ」「はあはあ、準にゃん可愛いよ準にゃん」……誰だよ最後の。

「んふふー、ほうら、はるくんのこんなに……」

「止めんかつ!」

「いだっ!」

なにやら一線を踏み越えそうだった準先輩の頭を半ば本気で叩いた。涙目になりながらも準先輩は俺の上半身から身体をのけた。

甘い空気が一瞬にして青空に消え去る。

「むー、釣れないなー。ボクがこんなに迫ってるっていうのに」

むしろあなたが迫ってるからです。……いや、他の人でも同じだ
けど。

「それはともかく準先輩。その、見て欲しいものの件なのですが」

半ば逃げるように話題を逸らす。いや、実際はこちらに話題を移動させるほうが身の危機がありそうなのだが、正直な話先ほど逃げ
いていた理由といえども気になって仕方がないのだ。

それはもう意外も意外。準先輩がそれを見せ付けなくなる理由も
理解する。恐らく先ほどの「見てー」発言は、子どもが親に褒めて
欲しいという想いの元から駆け寄るのと同じ原理だろう。

「あ、そうだよはるくん! 見て見て、凄いでしょ!」

そう言う準先輩の頭上、英語で言えば「over」ではなく「on」の方の頭上。そこに準先輩であらざるものがあつた。

何やら頭蓋という丸っこい部分から突起、いや三角形でありつつも刺々しい角を見せない軟体的なやわらかさを兼ね備え、さらに後を押すようにふさふさとした毛がついている。髪の毛の一部ではないだろう。かと言って新種の角でもないし、準先輩がいたずらで用意したおもちゃとも思えないそのリアルさ。

……現実逃避は止めよう。いわゆる『ネコミミ』とやらがそこには存在していた。

見た目のふさふさ感、ぴょこん、という擬音がよく似合いそうなほど小さく突出したそれは、紛れも無くネコミミと呼ばれるそれだつた。

「これねー、朝起きたら生えてた！」

やった！ アサガオの芽が出てきたよ！ 今日からあなたはアサちゃんね！

違つたろう。その反応は間違つてますよ準先輩。

「昨日ね、はるくに言われたことでずっと悩んでたんだ。ボクはネコが嫌い、でもはるくんが好き。どうしようどうしようってずっと悩んでて、泣き明かしたらネコミミがついてた。これはきっと神様からのプレゼントに違いない！ って思ったんだ。これでボクははるくんとちゃんと向き合えるって！」

……準先輩、そんなに俺のことを……。でも、綺麗な話に見えて内容凄いカオスです。

「あとねー、これが生えてきてからなんだか身体が火照って火照っ

て仕方が無いの……。ミミに風が触れるだけでビクンッってしちゃって……」

それは大問題です。ていうかどんな原理ですかそれ。

一説に寄れば猫の耳は一種の性感帯らしい。人間も同じであるが、結構なものだとか。にしたって風が吹くだけでその反応は病的だ。

「準先輩」

「ん？ 何なに、この火照りを収めてくれるって？」

「んなこと微塵も言ってますん。とりあえず病院行ってそれ見てもらいましょう。なんか危険です」

主に俺が。

しかし先輩はご不満に口を尖らせる。

「ええー。せつかくはるくんの大好きなネコミミが生えてきたんだからこれでいいよ。なんかこれがあるとパワー沸いてくるし。今ならはるくんの心を奪うことが出来そうな気がするよ！」

そんなもの力強く宣言しないで下さい。あと、心を奪う意味では既にこんな状況になる前から出来そうです。放心的な意味合いで。

そうやって俺と準先輩がしばらく乳繰り合っている（文字通りの意味で）、歩いている方向の遠い空から予鈴のベルが聞こえた。どうやらかなり長い間話し込んでいたようだ。主にそのモノの処遇とか。

「というわけでボクはこのまま過ごします！ このパワーではるくを絶対仕留めてやるんだから」

「本人の前で宣言しないで下さい。……まあ、学校についてはコスパレとかなんとか言えば、準先輩のことですから許されるでしょう

が……大丈夫ですか？ その、結構敏感なんでしょう？」

「まあねー。さっきはるくん追いかけてる時なんか、感じすぎて濡れてきちゃったし……」

「何がですか」

「パンツ」

ストレートだなあオイ！ 少しは恥らおうよ！

「その……さ、触ってみる？」

「え、え？ な、何をですか？」

落ち着け、落ち着くんた。自分でも声が上ずっているのが分かる。腰の前で手をもじもじと擦り合わせ、視線があちらこちらにさまよう。

まずい、いくら俺でも男だ。ここでそんな行為を強要されたら、墮ちるしか道はない。お母さん、僕はいけない子でした。今まで育ててくれてありがとう。

頬をこれまでにないくらい紅潮させ、準先輩がぼそりと呟くように言った。

「……ネコミミ」

……予想できてたよ？ 本当だよ？

しかし、的外れだったがこの誘いは同じくらい魅力的だ。元々ネコミミ属性は無いにしろ、ネコの肉球やそのもの自体には興味はある。野良猫などに触れたことも無かったし、猫を飼っている友人もいないので、触れたことが無かったのだ。

す、少しだけなら良いんじゃないだろうか。一回ちょっと押してみくらいなら。

「……では、せん越ながら失礼して……」
「うん……」

準先輩が強く眼を閉じる。真っ赤になった顔から湯気が出そうだと
いうかこういうことは恥ずかしいのか。
俺はネコミミにそおっと手を伸ばした。

ふにっ。

「にゃんっ……」

準先輩が色つばい声を上げたが、俺は気付かない。

「お、おおー！」

なんとという触り心地。高級じゅうたんのような毛の手触りであり、
かといってその弾力を失わない適度な肉付き。ふさふさもふもふ、
ミミの内部まで毛で覆われており、病み付きになりそうだった。

「んんっ、ふう……あっ、ん」

ふにふに。

「ちよ、はるく……ん？ も、もうそろそろ、あっ！」

ふにふに。

「あ、ああ……っ、ま、待って、これ以上は……くうっ」

ふにふに。

「……っつっ！！」

突如、準先輩の身体がビクリツと脈打つ。俺はそれでようやく異世界から戻ってきた。

しまった。想像以上に気持ち良かったので歯止めが利かなくなってしまうていたようだ。失敗失敗。

俺は謝るために準先輩に声をかけようとしたが、なんだろうか、準先輩の様子がおかしい。大きく息を嫌いして顔が本物人間の耳まで真っ赤だ。熟したりんごのように、何やらほのかに甘い香りもある。

「せ、先輩？ 大丈夫ですか？」

「……っつ」

準先輩が嗚咽を漏らす。頬から涙が伝っていた。

突然のことで俺はわけがわからず、肩に手を置いて言った。

「お、俺何かしました？ 何かしたのならすいません、やりすぎました」

「……は」

「え？」

「はるくんの馬鹿ぁー！！」

準先輩は俺の手を払い、身を翻して学校へ向かって走り去ってしまった。

俺はある種デジャヴを感じながら、その背中を見送る。い、一体なんだっていうんだ。

とりあえず解放されたからいいや、と思いつつもなんだか準先輩に悪いことをしたような気にもなり、地味で小さな罪悪感を感じ

つつも、その奥ではネロミニミの感触を思い出してニヤけていた。

「お母さん、あのお兄ちゃんニヤニヤしてるよー」

しゅわんわん……！

1、路上の変態は見てみぬふりをせよ（後書き）

どうも蜻蛉です。

なんだか好評のようで、消すか消さないか迷ってます。

正直な話、今すぐにも首をつりたい気分です。ある種の才能も感じてますが、んなもんいらねえよ。

今回はこのような感じでしたが、恐らく「序の口」かと。俺の暴走は止まらない。

2、キス with 体操着（前書き）

後書き参照。今回は重要かも。

今の心情を表すと、「今期アニメのエロ担当？ かのこん？ トラブル？ いや俺だろ」です。

2、キス with 体操着

ネコミミ事件から数分後。さっそくで悪いが神は死んだ。

小学校や中学校ではなかなかお目にかかれない状況だが、高校生活には授業一時間目に『体育』が存在する場合がある。我々寝起きの学生にとっては地獄のような時間でしかないが、今の俺にとってはさらに地獄だ。いや煉獄だろう。

「はるくきゅん！」

だから誰だよはるきゅんって。きめえって。

遠くで手を振る女子生徒、もう説明の必要も無いだろう。白鳥準こと準先輩フューチャリングネコミミンザ体操着だ。なんかこうして言葉にして考えてみると、恐ろしいものに見えて仕方が無い。

女子と男子が活動場所が違う。それが航行の体育のあるべき姿であるが、ならば学年が違った場合はどうだろうか。この広いグラウンドだ。体育をするに置いてたまたま違う学年の男女が出くわすのは何ら不思議ではない。不思議ではないが、やはり有り得てはならない。

この意見、まさに俺しか通らないのだが。

周りを見てみれば一目瞭然、クラスメイトの冷たい視線を浴びて冷や汗を流す俺。やめてくれ、あれはどう見たって宇宙人だろ。ミミ生えてるし。

「おいおい、またあいつだよ」「変態だよな、絶対」「準先輩に好かれる男は全員死ね！」「ところでブルマーについてどう思うかね諸君」「美学だと思えます」「はあはあ準にゃん可愛いよ準にゃん……あれ、なんかリフレイン。」

「はるくきゅん！ 前、前え〜！」

……前？

俺は視線を準先輩から離し、そのまま前にぐふおあっ!？

突如顔面に突撃してきたサッカーボール。そう言えば体育の授業中でした。鼻のてっぺんを突き破るような勢いでサッカーボールが俺の顔面にめり込む。頭蓋がぐわんぐわんと大きく揺れ、視界全体が陽炎のような、テレビの砂嵐のような、良く分からないものに支配される。なんとか足で踏ん張って地に膝を付かないようにしたが、努力もむなしく手の平まで地面とご対面。鼻血ももれなく特典でついてきました。

非常に不味い。このパターン、今の俺には未来予知が出来る。

「は、はるくんっ!？」

遠くから駆け寄ってくる足音がする。そうはさせまいと、俺は感覚も無い腕を上げて準先輩に待ったをかける。

「お、俺のことは良いです。ここは俺に任せて、この先の魔王を討伐してください……」

「ま、魔王って何!? そんなことより鼻血出てるよ!」

「これは歴戦の勇者がもつべき戦の証です。つまりケチャップです。どうですか、素晴らしい演出でしょう。だからここは放って魔王を討伐っていうか自分の授業に戻ってください……」

「でも物凄い膝とかが震えてるよ!」

「武者震いって奴ですよ……やりますね、サッカーボール。俺にここまで大量のケチャップを放出させるなんて、甘くて見ました。今から本気出します。だから準先輩は戻ってください……」

「このケチャップ血の味がするもん! 嘘ついちゃだめ!」

「間違えました。俺そういえばケチャップの代わりに昨日、顔面に輸血パックしこんできたんです。ハリウッド映画のメイク並みの技

術を使って今まで隠してきたというのに、失念です。だから準先輩は……」

「これはるくんの血の味だもん。ボクには分かるんだからね！」

なんてこつたい。レベルが高すぎてついていねえよ親方あ。あと他人の血は舐めちゃダメですよ準先輩。

次第に意識が遠のいて行く。どうやら思った以上に当たり所が悪かったようだ。あと運動不足のせい。

視界には準先輩の泣き顔……ああ、ご立派に鼻水まで垂らしちゃつて。

ギリギリの意識の中、俺は体操着のポケットに入っていたハンカチをようやく取り出して、準先輩の顔に押し当てる。どこに当たったかは分からないが、とりあえず渡せれば良いやと思った。この人、良く泣くけど、涙顔は似合わないんだよなあ……。

いや、そんなことはどうでもいい。本当にどうでもいい。俺が最後に意識がある中でやらなければならないのはこんなことではない。

「じゅ、準先輩……お願いが、あるんです」

「な、何？ キス？ キスしてほしいの？」

今そんなことされたら死にますし、そんなこと思わせぶりの発言もしてません。

「お、俺が、目覚めた時、に」

「目覚めた時に？ 何？ ボクが裸で隣で寝てると良いなって？」

準先輩。実はあなた、俺のこと心配して無いんじゃないですか？

「変なことを……」

「変なこと？ それなら大丈夫！ ボクの準備はいつでもおっけー

かくして俺は勇者が魔王を討伐するための一つの駒となり、空に消えたのだった。

という現実逃避をやめ、俺は意識を覚醒させる。激しい頭痛と瞼を開けてもいないのに襲ってくる眩暈。相当なダメージを頭に負ったようだった。歯を食いしばって、眉間周辺に力を込める。加えてなんだか異様に息が荒い。気絶すると呼吸困難に陥るなどという話はその聞かないが……不慮の自体だ、有り得ない話ではないだろう。ぐらつと頭が傾いたかと思えば、抵抗する手段も気力も無く、そのまま何かやわらかいものの上に倒れこんでしまった。

「こ、こらダメだよ！ まだ安静にしてないと」

頭上から声がする。随分と聞きなれた声のように感じるが、誰だったか思い出せない。どうやら意識はまだ闇の中に足を突っ込んでいるようだ。

ところでこの、なんだろうか、俺が顔を押し付けているベッドにしてはやわらか過ぎるものは。やわらかいに加えてなんだか人温かく、きめ細かくすべすべしているようにも思える。

……いや待て、冷静になろうか俺。

動かしかけた首を自らの筋肉でがっちりとホールドし、壊れた口ポットのように微塵も動かなくなる。これはきつと動いたら負けなのだろうと俺は一瞬にして悟った。

某ラブコメのベタ展開として上げられる、いわゆる一種の「ちょっとした事故」に遭遇するわけには行かない。記憶を巡れば簡単なことだ。先ほど聞こえた声が準先輩であることは間違いなく、な

らばこの俺がのっかっているものは……。

「んふふ〜。ボクの膝枕、気持ちいい？」

……そういうことだ。

……どうということだ？ 何故俺は準先輩に膝枕されている。頭上を見上げれば体操着姿の準先輩。下から見上げたその双房はまさに度迫力で、汗のせいで服が張り付いており、形がくつきりと確認できる。さらにその奥には白い体操着と対を成す色をした下着が垣間見える。

脳天に神経を集中させればとても危険な区域に遭遇することが出来そう。運動で地味に引き締まっているふとももが俺の頬を挟むようにして配置されている。色っぽい状態でもあるが、言えば『捕食』されました。

サッカーボールでノックダウンしたところまでは記憶がある。ならば、何故俺は保健室でぐっすりと惰眠をむさぼっていない。というか今何時間目？

「もう三時間目の授業が始まっちゃってる頃だと思っつよ？」

「……先輩、授業は？」

「いやー、はるくんがあまりに可愛い寝顔を見せてくれるから、そのまま200回くらいキスしてたらなんだかどうでも良くなっちゃって」

「何してんすか!？」

俺は慌てて頬やら額やら唇やらをチェックする。しかし、そこには誰かが何かで触れたような形跡は無い。ちなみに頭は準先輩の膝の上のまま。動けないし、動きたくももない。

「もう、冗談だよはるくん。いくらボクでもそんな気がおかしくな

「つたみたいなのはしないよ」

有り得ない話じゃないから怖いんです。

「でも、その、ね、あまりに可愛かったから、ちょっとだけ、違うことやってしまった……」

ほら、裏がある。ていうかそんなに赤面しないで下さい。

準先輩はもじもじとふとももを擦り合せた。その上には俺の頭があるわけで、その素肌に触れている部分がなんとも言えない感触に襲われる。ぶっちゃけ恥ずかしいのは俺も同じです。

逃げようと頭を上げようとするが、その洞察力は鬼の如し、準先輩に一瞬にして定位置に戻される。しかも赤面したままで。

「な、何を、したんですか」

逃げることは挫折し、震える声でそう聞いた。

「その……口で言うのは恥ずかしいから、今から同じことやってもいい？」

前言撤回！ 逃げなきゃダメだ逃げなきゃダメだ逃げなきゃダメだ！！

急いでこの檻から逃げようとするが、時既に遅し。頬に優しく素手を当てられ俺はノックダウン。背筋に桃色の衝撃が走る。熱いまなざしと俺の視線が交錯する。準先輩の世界に引き込まれたように一気に身体から力が抜けた。

「はるくんがイケナイんだ……こんなにボクを夢中にさせるから……」

……

準先輩は全ての責任やその他もろもろを押付けるようにして俺の唇に自分のそれを重ねた。

「……っ！？ んむっ！？」

重ねた、などと優しいものではなかった。貪るように、それこそ捕らえた獲物に喰らい付く様に唇と舌で俺の口内を犯す。準先輩の狂おしいほどの好意が唾液とともに俺の中に流れてくる。その恐ろしい感情の量に、心が捻り潰されそうだった。流石の俺も頭の中で物事を考えることを放棄した。

口内で舌が暴れ回る。全てを奪いに来たとても言いたげなほどに攻撃的だ。時折感じる準先輩の香りにどんだん脳内が侵食されて行く。ぐちゅぐちゅと絡み合うたびに卑猥な音が聞こえる。俺の聴力は自然とそちらに向かっていた。

しばらくそうしていると、準先輩が一度呼吸を整えるためか、俺の唇から口惜しそうに離れた。離れたところには俺と準先輩を繋いでいる銀色の細い糸が引いた。準先輩はそれを愛しそうに眺め、艶美な微笑を零すと口元を舌で舐め取った。

「はるくんが口を切ってたから、こうやって消毒してあげたの」

驚きとある種の気持ちよさで俺は言葉が利けなかった。ただ坦々と、妙に大人な表情をした準先輩を眺めていた。

「このネコミミのおかげなのかな。いつもよりも、もっと、もっとはるくんを好きでいられる気がする……」

そうか、そのミミのせいなのか。

確かに準先輩は過激なほどのスキンシップをしてくるが、いくら

なんでもここまでの行為はしなかった。キスも初めてではなかったが、こんなに深くしてくることもなかった。

もしも本当に準先輩をここまでしてしまったのがネコミミのせいだと言うのなら、俺は全力でネコミミを恨みたい。

……タイミングが悪すぎるんだよ、クソツ。

「俺は……俺は先輩に」

その時、校内から授業終了のベルが鳴った。俺の言葉は遮られ、準先輩に届くことは無かった。俺には、言わなきゃならないことがあるのに。

そんな気持ちを汲む仕草など片鱗も見せず、準先輩は満面の笑みで言った。

「もうお楽しみタイムは終わり！ 先生に怒られるとイヤだから帰ろっか、はるくん！」

楽しそうで、嬉しそうで、幸せそうな準先輩の顔を見ていたらなんだかどうでもよくなってきた。成せば成る、時の流れに身を任せるとしよう。

「ところで準先輩、三時間目がどうのこうのって言ってましたが、まさかとは思いますが先生には一言……？」

「なーんにも言ってないよ？」

「ですよー」。

まあ、生涯初の体操着状態での膝枕を堪能したからここは俺が一步引くことにした。

2、キス with 体操着（後書き）

どうも蜻蛉です。

書いている途中、「あれ？これ官能小説（ry）」なんて葛藤を開始してましたが、もう放置することにしました。子どもには見れない作品に仕上がる可能性も否定できません。

この作品ですが、恐らくよくある80話とかそんなくらい続いている作品のようにはならず、あくまで「描写の勉強」に使っているために6話前後での完結となります。更新速度は最高で一日ペース、最悪で一週間辺りかと。

まあ、「こんなのも書いて欲しい！」なんてシチュがありましたら場合によってはリクに答えないことも無いですが。

あとは作家紹介のHOMEからブログ飛べるようにしました。

では、次回でお会いしましょう。

3、メイド服で思い出したことがある(嘘)(前書き)

後書き参照。

今回はガチ話も入り、正直「僕には……無理だ」という感じ。俺にラブコメは無理だあああ!!
文学という道へ帰還して良いですか？ え？ダメ？

3・メイド服で思い出したことがある(嘘)

ポイズンクッキングというものをご存知であろうか。いわゆる料理ベタな人が作る料理は食べれる食べられないという領域を超え、国の軍事力に加算されるほどの破壊力を持つ毒となることがある。それを巷でそう呼ぶらしい。

どうでもいいが、昼休みに突入した。四時間目の授業には無事に出席し、その時家庭科室で謎の爆発事故が起きたこと以外は平和な時間だった。二三時間をサボったというのに、俺は机に額をへばりつけていたのは内緒だ。

そのような事件が起きたために、学校は臨時休校となった。校庭の前には赤い車が何台か止まっている中、生徒たちは平然と中庭で昼食を取る。理不尽な世の中になったものだと思う。幸い中庭は爆発事故の起きた家庭科室とは逆側であり、消火活動に当たる勇敢な戦士の姿を拝むことは出来ない。残念だ。

そうだ、どうせなら一度はそういった現場を拜んでおきたいものだから、今すぐそちらに行って消防士を応援してこようかしら。

「はるくーん？ 何逃げようとしてるの？」

おっとお姉さん、袖を掴まないでくれないかね。クリーニングにかけたばかりでしわを付けたくないのだよ。あと消防士見たい。

「そんなこと言って逃げる気でしょー。ボクのお弁当見るたびにそうなんだもん。もう騙されないんだからね！」

確かに俺は準先輩の弁当箱を見るたびに逃げるが、今はそういった事態ではない。

「なんで……メイド服なんですか……」

そう、何故か彼女はメイド服と呼ばれるそれを着ていた。お仕着せとか言ったほうが良いだろうか。良くないな、うん。

白と黒を基調としたつくりで、黒いワンピースの上に白のエプロンドレス、準先輩が座る足元からはフリルつきのスカート部分がふわりと風に舞っている。いわゆる一種の『そういう層』向けというよりは、英国正統派のドレスのようである。傍らに置いておけば、それとなく気分を満喫できそうなほどに似合っている。カチューシヤはネコミミが邪魔だったのか同なのか知らないがついていない。

「あ、これねー、家庭科の授業のまま出てきたから。どう？ 似合う？ 似合う？」

これで家庭科の授業出てきたの！？ ネコミミメイド姿で！？ 先輩は立ち上がって、ネコミミをびよこさせながらスカートの裾を掴んで一回転してみせる。

と、その時！

悪戯な桃色の風が準先輩の無用心な股の間を通り抜ける。同時に流れに身を任せるように、フリルのついたスカートがめくりあがり……。

「にゃ！？」

準先輩は慌てて手でスカートを押さえ込む。だがしかし、俺の目はごまかせん。鷹の目よりも遠く、肉食動物より炯眼な眼の持ち主である俺の観察力から逃れることは出来ない……！

なんて阿呆な話はないが、俺も男だ。ハプニングがあれば目を向けてしまう馬鹿な生物であり、ちゃっかりと中身を確認済みで、同時に信じられないものを見た。

準先輩は普段より数倍顔を赤らめ、スカートを掴んだ手はその場所を離れず、潤んだ目で上目がちに俺に言った。

「……………み、見た？」

「断じてそんなことはありませんぞ親方」

「あなたが見たのは白の下着ですか、それとも黒の下着ですか？」
「黒です」

あ、しまった！！

「ばっ、ばかばかばかばかばかあ！！　なんで見るのよお！」

「不可抗力っていつか視界に飛び込んで来ただけですって！」

準先輩はぽかぽかと俺を痛くもない拳で殴ってくる。

「うう……………今日のは見せられる下着じゃなかったのに……………」

「み、見せられる見せられないとかあるんすか」

「あるの！」

はいすいませんごめんなさい。

にしても黒ってなんだろうか。昨今の女性の下着市場云々需要供給の割合云々知ったことではないが、最近の女性はなんとも大胆なものを書くものだ。男性なんてトランクスかボクサーパンツしか無いってのに。感心する。

「あとで覚えておきなさいよ、はるくん……………」

なんすかその恨むように実は熱っぽい視線は。凄い死亡フラグを感じてます。

「それより先輩、昼食を取るんですよね？ さっさと食べましょう」

俺は半ば逃げるように死亡フラグに向かった。ああ、何言っているのは分からないと思うが、俺だって分からん。ただいえる事は一つ、どつちにしる死ぬんだろっとな俺は。

準先輩は今までの表情をころつと変え、恥ずかしそうでも嬉しそう顔で弁当箱を取り出す。シンプルにピンク色で統一された女の子らしい弁当箱である。箸も割り箸ではなく、持参したマイチヨップスティック。一本しかないのは勿論であるが、もういいや。

「じゃじゃーん！ 今日のお弁当はこんな感じでーす！」

神々しく開かれた弁当箱の中身が俺の視界に写る。

弁当箱の中は二分割されており、しきりを挟んで片方には真っ白なご飯が敷き詰められており、これまたシンプルに梅干が一つ乗っている。それを中心として桜色のでんぷんがハート型を作っている。まだ名前を書かれてないだけましである。そしてもう片方、おかずのほうはこれが見張るものがあるほどにきちんとしたバランスでトマトの赤、ブロッコリーの緑、玉子焼きの黄色と色鮮やかな配色。しかしその中にはから揚げやハンバーグといったパワーになりそうな、男の好むものも入っている。思わず涎が出そうになるほど立派な料理であった。

……だが、まだだ。

「そーしーてー、今日のお楽しみタイム！」

準先輩は後ろから隠していたものを取り出す。

「ボク兼はるくん専用！ 栄養ドリンクー！」

目の前に現れたのはゴールドに光り輝く液体が入ったビンだった。うおっ、まぶしっ！

ところで考えることがあるんだ俺。色の三原色とかさ、あるじゃんあれ。色々混ぜたら結果的に黒に近くなるぞーって奴さ。まあほら、栄養面を重視して半ば青汁ジュースみたいのが出来上がるんだつたら俺も現実味があつて良いと思うんだ。でも黄金色ってどうなの。何をどうしたらそんな色になるの。金粉だけで液体作つたつてそんな輝かないと思う。

「んふふ、ちょっと待っててね」

先輩は更にどこから取り出してきたのか、取り皿を出して、折角綺麗に弁当箱に収まっている弁当を皿に移してしまふ。

そして、黄金の液体が入ったビンの蓋を開けた。恐ろしくドロドロしていて、もはやドリンクとか呼んでいい代物ではない。全世界の食品という食品に土下座して謝りたくなる。準先輩は恐怖で震える俺を尻目に、何を勘違いしたのか「そんなに楽しみなのー？」とかほざきやがりながら黄金の液体を白米にかけた。

先生。お百姓の怨霊が後ろに見えます。

「うわー、綺麗だねー！」

王宮とかに出したら良いんじゃないでしょうか。好評ですよきっと。その後誰も感想を残すことは無いでしょうけど。

真っ白な米が金ぴかになり、なんだか菌並びの中に一本だけ金菌を入れたオヤジを思い浮かべた。同時におぞましい臭いが漂いはじめる。空気汚染なんてレベルじゃない。そこら辺の雑草がどんどん死に絶えていくのが目に見えるようだ。

「じゃあ、食べよっか。ボクが食べさせてあげるね！」

準先輩は加速する。自慢の四次元ポケットから一つのチョコレートのような形の長方形のブロックを取り出す。だが、チョコレートにしては分厚いし、一つ一つのブロックがはつきり分かれているように見える。

「……それは、なんですか？」

ようやく声を出すことに成功し、俺はそう準先輩に聞いた。

「カレールー」

ふざけんなああああ！！

と叫んでやりたいが、もうなんか呼吸が出来ない。死ぬかも。

「まだ足りないの？ あ、それともあれ？ ボクの口移しじゃないとか食べられないとか？ もうっ、仕方ないなー」

準先輩は一度そのグロテスク画像と化したものを下げ、四つん這いになって俺に寄ってきた。

「じゃあ、ボクがメイドとしてはるくんにご奉仕としてあげてから、はるくんもご主人様らしくボクに命令してみて？」

思考が段々と纏まらなくなってきた。俺はなんだ、準先輩に付き合えばこの苦痛から解放されるのか？ ならばやるほか無い。

「じゅ、準先輩……お願いが」

「違う違う。先輩なんて言ったら雰囲気出ないじゃん。あとお願いじゃないでしょー！」

どうでもいいから早く……。

「準……」

「なんですか、ご主人様？」

準先輩が意識がはつきりとしていればぐつと来るような発言をする。心なしかなんだか距離が近い気がする。

「お、俺……」

あれ？何をすればいいんだっけ。あまりに錯綜した意識が、記憶をも混乱させる。

俺はなんだ。俺は、準先輩にどうして欲しいのだろうか？

いつからだっただろうか、準先輩が俺にだけアタックするようになったのは。高校一年の頃はまだ俺は準先輩のことを知りもしていなかった。校内でもはっちゃけた人として有名ではあったが、所詮は先輩、部活動にも入っていない俺には路傍の石くらいの話として受け流していたはずなのだ。

そんな日常が変わったのは文化祭辺りからだっただろうか。友人の誘いで準先輩が経営していたメイド喫茶に行き、そこで初めて準先輩を見たんだ。その時は、そのあまりの美貌に目を疑ったものだった。可愛いか綺麗とか、そういう形容詞を超越して、俺は本気で準先輩に見惚れていた。友人も言っていた。『あの人は高嶺の花でありながら、よく崖の下まで遊びに来てくれる、近くて遠い存在だ』。俺にとってもそうだった。メニューを持ってきてくれたとき、気さくな態度で話しかけて来てくれたが決して自惚れられない。彼女は崖の上に帰っていくのだとすぐに分かった。

ああ、そうだった。大事なことを俺は忘れていたんだ。

準先輩にほれたのは、俺が先だつたんだ。

体育祭などの行事に積極的に参加し、俺は準先輩を自然と追うようになつていた。その人望溢れる気質は周りの人を老若男女構わず魅了し尽くし、俺もその中の一人だった。

体育祭の終わりから俺はめつきり準先輩と会えないことを悟り、ゲームを持ちかけた覚えがある。

『先輩、鬼ごっこをしませんか？』

『鬼ごっこ……？ どうしたの急に、はるくんらしくもない』

『俺が最初鬼で、準先輩が逃げる側です。俺はその、先輩を捕まえて、言いたい事があるんです』

『言いたいこと？』

『はい』

『ふうん……じゃ、今から開始ね、はいっ、スタート！』

『えっ？ ちょ、ちよつと』

その時俺は準先輩が全力で逃げることを予想して、思わず手を伸ばしたのだ。しかし、準先輩は一步も動かなかつた。そこに立ち尽くして、俺を真っ直ぐ見据えていたのだ。

俺の手は見事準先輩の豊満な胸に収まり、その感触を楽しむ間もなく俺は手を急いで引いた。

『す、すいませんっ！』

『いいいいいよ。で、タッチしたから、言いたいこと言つて？』

『え？ いや、その……』

『なあに？ ボクの自慢のバストを触っておいて逃げるなんて許さないよ？』

そう言う準先輩の笑顔はどこか優しく、俺の心臓の鼓動を収めるには十分なものだった。

「俺は……その、せ、先輩が、その……」

精一杯の想いと、緊張と、勇気を込めて送った言葉。

「す、好きです……」

声は小さく、どもってしまった。でも先輩は「そっか」と相槌を打ってくれた。そして、こう続けたのだ。

「じゃあ、今度はボクが鬼だね」

俺はわけがわからないまま、先輩の方に顔を向けた。先輩が依然としてニコニコと笑ったままで、答えなんて到底くれそうになかったのを覚えている。

「はるくんは全力で逃げて。ボクに絶対追いつかれないように、ずっと、ずっと逃げて。ボクがそれを必死に追いかけてあげるから。そうだね、ボクの気持ちをはるくんに届いたとき、この鬼ごっこは終わり。勿論それを判断するのはボクじゃなくてはるくん。おっけー？」

言っていることが分からないまま、俺はそれでもいいやと思って、頷いた。

準先輩とはそれから一年間は顔を会わせなかった。俺は最初こそ何日も待ったものだが、段々と希望も薄れ、高校二年に上がる頃には約束もすっかりと忘れてしまっていた。ただ漠然と、そこに白鳥準という憧れの先輩がいたことだけしか、覚えていなかったのだ。

しかしその二年二学期の始業式の時、学生代表で準先輩はこう高らかに叫んだのだ。

『お待たせはるくん！ 今からボクは死ぬ気ではるくんを追いかけるよ！ 本気で逃げないと、取って食べちゃうからね！』

俺は学校で晒し者になり、毎日のように準先輩から過剰なスキンシップを浴びるようになった。俺はそれを漠然と「好きな人と両思いになれた」としか思わなかった。

だが、そつだ。俺はまだ、鬼ごっこの最中だった。俺には、準先輩の気持ちを確かめる義務がある。

俺はどこか過去へと飛んでいた記憶をたぐりよせ、現実に戻る。目の前には期待するような目で俺の言葉を待つメイド姿の準先輩。何をして欲しいの？

そつ準先輩はもう一度聞いてきた。

「俺は……準に……」

「ん？」

ダメだ。クソ、こんな時なのに、意識が持たない。まさか一日で二度も意識を落とすとは、今日はネコミミのせいもあって厄日である。

「好きだと、言って欲しい」

その言葉が言えたか分からない。

もう千回は言われたかもしれない言葉。それが、今は無性に欲しかった。

3・メイド服で思い出したことがある(嘘)(後書き)

どうも蜻蛉です。

今何時？そうねー大体ねー。午前四時です。死にます。

挫折しそうなので、もう諦めてガチりました。こんな俺でごめんなさいごめんなさいごめんなさい(r y

これと同時進行で「罪人の涙」という作品を書いています。が、あまりに対照的過ぎて俺の脳みそがついていけません。だれかボスケテ。

4、平手打ち(前書き)

後書き参照。

更新遅れて申し訳ないです。けど、「最高にハイってヤツだぜえええ」という気分なので、次話の更新はなるべく頑張ります。

4、平手打ち

第二話。知らない天井。

そんな感じで俺は目を覚ました。まさか一日二回の気絶という傍若無人な管理者でも無いだろうこの素晴らしいハイペースな一日の進行速度。頭痛も吐き気も収まっており、俺の背中には冷たいシーツの感触があった。

真っ白な部屋に、薬品特有の臭さが部屋全体に広がっている。この消毒液の臭いは嫌いではないが、好きでもない。黒板を引つ掻く音は嫌いでもないが、引つ掻くと嫌いだ。

カーテンで仕切られた個室の中に、俺はいた。ふと外を見てみると、夕焼けがグラウンドを照らし、部活動をしている運動部の連中がその汗を光らせている。どうやら、ほぼ半分の授業をサボり、放課後へとしゃれ込んでいるようだった。俺は大きくため息を吐いて、ベッドの身体の全体重を委ねた。眠気は無いが、動く気も無い。

それもそのはず、俺の右手は、ある人物……なんて言わなくて良いか。白鳥準先輩がしっかりと握っているからだ。今日は三年は六時間授業だったはず。とすれば、二時間以上はこうしていてくれたことになる。準先輩の体温を手の平に感じながら、俺は思わず頬を緩めた。

なんだか、とても懐かしいことを思い出していた気がする。走馬灯つてやつだったのだろうか。忘れていた一つの約束を思い出して……俺は苦しくなった。

先ほどから照りつけている曙光のせいだろうか。準先輩の陶器のような肌が夕焼け色に輝いて見える。気付かれないようにそっと触れる。最初は重ねられている手の甲、次に手首、腕と上っていつて、すべすべとした感触に流されて頬までたどり着く。決して化粧つきの無いものではないが、きつとそんなものをしなくても綺麗なんだろうなと思う。

寝息が俺の掌にかかる。無防備に晒された唇から漏れる吐息はさながら妖精のものようで、あまりにこそばゆくて俺は思わず身を乗り出して準先輩の鼻をつまんだ。

「んぐ……」

あ、やべ。これ癖になりそう。

息苦しくなったのか、準先輩は顔を振って、手を振り払った。頭の上のネコミミが段々同一化している気がする。なんかあっても不自然じゃなくなってきた。

にしても、このネコミミは危険すぎる。元から危険すぎる準先輩に媚薬効果みたいなのを及ぼしているこれは、ぶっちゃけ今すぐにも切り取るべきだ。おかげで今日は死ぬかと思った。ああ、主に性的な意味でな。

ひっぱたら千切れないかなー、とか恐ろしいことを考えて、思わず俺はネコミミに手を伸ばした。

「んっ……」

扇情的な声上がる。やばいと思ったときにはもう遅く、準先輩は敏感になっていいる耳をさわられたせいで目覚めてしまったようだ。細い眉毛をこすって、豊かでいらっしやるものを隠す仕草も無く、大きくうーん、と背伸びした。

「おはようございます先輩」

「あ、はるくん。目が覚めたんだ。大丈夫？」

「おかげさまですつきりと」

「下のほうも？」

……そういうシモネタは女子生徒にあるまじきだと僕は思うんで

すおとうさん。

「あははっ、冗談だよ。ごめんね、なんか、弁当の中の具が少し腐ってみたい。保険の先生は食中毒だって言ってた」

先生、俺は先輩の弁当を食った覚えが無いんです。強烈な異臭だけでやられたんです。食材に罪は無い。だけど準先輩を恨むのは嫌だから、今だけ恨ませてくれ。あの金色の液体死ね。マジで。

そういえばあの弁当はどうなったのだろうか。気になって聞いてみた。

「先輩、あの弁当は結局……」

「ん？ 食べてないよ。保険の先生が捨てちゃった」

「あの栄養ドリンクは？」

「家に三十本くらいストックがあるから大丈夫！」

頼む、今すぐ捨ててください。腐ってます。ゲテモノ的な意味合いで。

「それよりそれより、はるくんっ」

何か、ものをねだる子犬のような仕草で準先輩が俺に接近してきた。っていうか、ベッドの上に飛び乗ってきた。そんなでもって跨ってきた。ああー、犯されるわー。

準先輩はベッドに横たわる俺の上まで来て、いつものような潤んだ目とは違う、キラキラと星マークが見えそうなくらい期待に満ちた目で俺を見下ろしてきた。膝部分に乗っかられているために脱出不可能。あと、スカートの内部という既知の領域が俺の足の感覚という感覚を襲撃している。視線を降ろすと見えそうだ、なんか。

しかし準先輩はそんなもの微塵も気にした様子は無く、むしろ俺

のほうに上半身もしなだれかかってきた。俺の両脇の外側に肘を置いて、顎に手を添える。んふふーとか言っつて、ちよんちよん俺の頬を付けてくる。なんだこれは、新手の恋人プレイかござるあ！ 照れて死ぬ！

「気絶しちゃう前のこと、覚えてる？」

気絶する前というと、もうなんだか曖昧ではあるが、とにかく金色だった記憶しかない。ハンマアアアア！ とか叫んで色々崩壊しちゃうくらいインパクトのある金色。

「それじゃなくて、最後にボクに言ってくれた言葉だよ」

「最後に言った言葉……」

反芻して記憶を探ってみる。追憶の彼方に消えた青春の記憶は蘇ったが、二時間前の出来事が思い出せない。

「もっつ、忘れちゃったのー？」

わざとらしく頬をふくらまして、準先輩が怒ったように言っつ。むー、と不満をたらたら漏らしながら俺の胸部を指先でぐるぐると円を描いてくる。「の」の字を書いているようだが、何の意味があるか分からない。ていうか用法間違えてるきつと。

「おーもーいーだーしーてー！。それで、ボクにもう一回言っつてー」

駄々っ子がほしいものをねだるような子どももの真似をする。

このままでは準先輩の機嫌を損ねかねないので、俺は必死こいて何を言っつたか思い出すために模索し始める。

何を言っつたか。

あなたに一生を誓うために靴を舐めさせてください？ いやさすがにねえな。

君を……食べちゃいたい。どこの少女漫画だこれ。

君のパンツを一万円で売ってくれYO！！ うぜえな。っていうか誰だよこれ。

アイラブユー。無表情で言うとカツコイイ。でも違う。

様々な可能性を脳内で繰り広げるが、どれもこれもしっくりこない。準先輩が言われて、こんな風にキラキラとした目になってしまつようなことを俺が言ったのだ。変態チックなことを言ったのなら、俺の貞操はとつくに消え去っている。とすれば、もつと純粹なものだ。

俺は一種の占い師ではないが、人間、人の瞳を見れば思考が垣間見れるという噂があるので、それを実践してみることにした。準先輩の漆黒で宝石の輝きを持つ芸術ともいえるその瞳の奥に、果たしてどのような思考があるのか。

……

……

…

「お、思い出せないです……」

無理でした。

「えー。ボク、物凄い期待してたのにー。あの言葉は嘘だったのかなー？」

「ど、どんな言葉だったのか俺には思いだせませんが、きっと極限状態で吐かれた言葉は本音ですよ」

「そう？」

「ええ、半ば俺にとっては遺言みたいなものだったかもしれませんし」

「ふーん。じゃあ、許してあげないこともないかなー」

許す許さないの問題だったのかこれは。準先輩は多少納得が行かないようだったが、俺も思い出せないのだから仕方が無い。

しばらく上の空で天上を見上げていた準先輩だったが、ハッと何か気付いたのか、異様に不安の残るニヤついた顔で俺を見つめてきた。

そう、これだ。これがいつもの準先輩。悪い予感と悪い予感と、あと悪い予感と最悪の事態しか想定できません。

「ねえ、何を言ったのか、気になる？」

「いえ、毛ほども気にならないです」

「だよー。物凄い気になるって顔してるもん」

話が噛合ってねえ!?

「ねえねえ、条件次第では、教えてあげないことも無いよ？」

「それじゃあダメですね。残念ですけど諦めます」

「え？ 条件はなんだって？ んふふ、そんなに難しいことじゃないから安心して良いよ」

この人押し切るつもりだ！

俺は逃げ出したい！ しかしまわりこまれた！ 逃走は未遂に終わりました。

そうして、準先輩の口から裁きが下された。

「今日一日、はるくんをボクが所有する権利をくれたら教えてあげる！」

「……は、はあ？」

「もちろん言葉通り深夜零時までね」

うわっ、なんだろう。一瞬大丈夫かとも思ったけど、その発言聞いただけで鳥肌立ってきた。色んな善悪の意味で。

「どうする？ ん？ んん？」

「あ、後ろに俺のクローンが」

「ホント！？ はるくんに挟まれて寝るといふボクの夢が叶う！」

適当にでつちあげを言ったつもりが過剰に反応して、準先輩は身体ごと後ろを振り向く。あとその夢は一生叶いません。

俺はずれた僅かな隙間を縫って、準先輩の全身拘束から逃れようと蛇のように身体をうねらせてベッドからの脱出を試みた。多少荒業ではあるが致し方あるまい、準先輩の足を持ち上げて、半身を引っくり返すように足を上に上げた。もちろんしっかりと中身もご確認させていただきました。ごちそうさまです。

きゃっ、とか細い声を上げてベッドに準先輩が倒れる。作戦は成功したようだ。もはやなりふり構っている暇は無い。俺は悪いと思いつつも最後の詰めとして準先輩の上半身を降りる側とは逆の方向に傾けるために押し倒した。

しかし、それが仇となる。肩の部分を押して向きを変えたというのに、準先輩は歴戦の武士のごとく素早い動きで俺の腕を脇のしたに挟む。俺が押し出した力学的な衝撃は緩和できずに、準先輩は思惑通りに窓側に上半身を向けることになった。しかし、その脇の下には俺の腕。完全に離すまいと脇の下に力を入れているのが分かる。手首が圧迫されて動かない。九十度傾いた上半身に釣られるようにして俺の腕が引っ張られ、情けなくも俺はベッドという拘束用具に舞い戻ってしまった。

ちょうど俺の真下に準先輩が来るようになり、押し殺せなかった勢いで準先輩の上に俺は倒れこんだ。

そこからの行動は寸劇。わざわざ準先輩は俺の身体の下に上体を

滑り込ませ、わざと押し倒されたような形に持って行った。さつきとは真逆の立場になる。態勢だけだが。

「せっかちなえー、はるくんは」

熱っぽい視線を浴びせるように向ける準先輩は、俺の頬をがっちりと掴んで離さない。その手の平も心なしか熱い。

そのまま引き寄せられて、俺は準先輩に抱きしめられた。温かな身体の温度とか、やわらかい感触とかを楽しんでいる暇もなく、準先輩は俺を攻める。

「耳ってね、結構ピンカンなんだよ」

言って、俺の耳の穴を貪るように舌を入れてくる。くすぐりたいとも気持ちがいいとも言えない際どい感覚が脳髓に広がって、一気に俺の理性を溶かしていく。ぴちゃぴちゃと水音を立ててうねりをあげる舌はまるで別の生物のよう。未知の感触に身体全体が快感の赤信号を発信し、全身の筋肉が強張るのが自分で分かった。

「うっ……あ」

意志とは無関係に情けない声を上げてしまう。必死に抵抗するだけとなった俺に勝機は無い。

「ふふっ、かわいい」

俺には、その甘くとろけた声だけで心臓の音を高鳴らせることになる。

だが、今日の俺は違った。ダメだ、流されてはいけないというその一心で、先輩の肩をゆっくりと押す。先輩は困惑した表情を浮か

べて、相変わらずの反則級の視線を向けてくる。

「どうしたの……？」

落ち着け俺。一体何を思い出したのか、思い出すんだ。

このまま準先輩に流されたらいけない。きつと俺は彼女と好き合っってしまうし、一度その好意に身を委ねたら二度と帰って来れなくなる。加えて、多分、先輩を……傷つける。

快樂によつて陸にあげられた魚のように跳ねている心臓をなんとか抑えて、俺は準先輩の上から身体をどかせた。そして、そのまま後退して、なんとなく正座をする。

先輩も俺のただならぬ気配に感じたのか、着崩れてしまった制服を調べて、同じく俺の前に正座した。ふざけた先輩ではあるが、こういふところを見ると、本当にいい人だ。だから、俺はこの人が好きになったのかもしれない。

「はるくんは……こういふのがイヤ？」

心配そうに聞いてくる。イヤなわけがない。俺はツンデレではないけれど、態度は嫌がついても本心は鼻血噴出しそうなほど嬉しんだ。だって好きな人に抱きつかれたり、キスされたりして、心を平常にするなんてそう楽なものじゃない。だから俺は全力で首を横に振って否定した。

「じゃあ、ボクのこととは好き？」

「……」

答えられるはずの問いに、俺の喉は石化した。言葉が胸の辺りでつかえて出てこない。予想外でもなかったんだろう、準先輩の表情は次第に曇るものの、焦りなんか微塵も見せない。ただまっ直線

から俺の言葉を待っているのだ。

本当に強い人だ。俺が勝手に告白して、勝手に好いて、それで相手に好かれたらこうやって曖昧な態度で何も言わないというのに、先輩は平手の一つもよこさない。俺としては一発ぶん殴ってくれたほうが良いんだけど……いや、それはそれで悲しい。

期日はいつだったかな、と考えて思いを馳せる。どれだけの間、こうしていれば彼女の好意と、自分が彼女によせる好意から解放されるのだろうか。もしかしたら永久に準先輩からは逃げられないのかもしれない。聡明である準先輩にしたら、俺が何かを抱えている、なんてことはもう、お見通しも通り越して事実になってるかもしれない。

ああ、なんだかそう考えたら、もういいかな、とか思えてきて、石になってしまった喉が少しずつ氷解していくような気がした。

「俺ですね、この学校、好きなんですよ」

最初に出た言葉はそれだった。今の状況とはまったく関係が無いけれども、先輩は黙ってその話に頷いてくれる。俺は安堵して、重い口をほぐしていく。

「まあ何が好きかって聞かれても、ちょっとほかの学校より文化祭で羽目外せたり、話の合う友人がいたりするって、それくらいしかないんですけどね」

「……」

「メイド喫茶とかネコミミとか、普通考え付くけどしないもんでしよう？ 大体喫茶自体開くの面倒くさいし、屋台とかお化け屋敷のほうが一番安上がりですもん。去年の文化祭は酷かったっすね。先輩のクラスが大渋滞だったじゃないですか。ああもう、あれ見た瞬間、俺にはこの学校しかねえなあと思いましたよホント」

「……」

「憧れの先輩がメイド服にネコミミつけてるって話じゃないですか。鼻血ものですよ。大渋滞を大洪水で埋め尽くせるくらい興奮しましたよあれは。あ、思い出しただけで鼻血でそう」

やべ、シリアスなシーンなのに無様になんか垂れてきたかも。そんな俺に準先輩は相変わらず黙ったままで、ハンカチをくれた。桃色の綺麗なものだ。汚してしまうのは気が引けたが、結構まずい。一礼して頭を上に向けてハンカチを鼻に当てさせてもらった。

「まあ、そういうわけで、この学校は好きなんですよ」

だっせえ。なんか鼻声だよな俺。でもまあいいや。面倒くさいし、終わらせよう。

「そんでもって、俺、近々転校するそうなんです」

「……………え？」

場が一瞬にして凍り付いて、有無を言わずびび割れたのが分かった。

天井を向いているから分からないけど、きっと先輩の顔は酷いことになっていいると思った。すべての生命という生命に糧を与える太陽が、絶対零度で凍ってしまった。世界は真っ黒に包まれて、雨も降らないで、いつかパリンと音を立てて終わってしまう。そんな大袈裟な想像が出来た。

思わず自嘲の笑みが漏れてしまった。氷解しきっていない俺の罪深き声帯は、ガラガラとわけのわからない腐った瓦礫の崩れる破壊音しか発声させてくれない。ああ、なんと無様なことが。愛する準先輩の世界が青く、蒼く、冷たく。

「いつから、転校するって知ってたの」

いつもの陽光のような温かさは無い。ただ坦々と、言葉を体面に並べるように聞いてくる。

「今年の、初め頃です」

「ボクが講壇の上で宣言をしたあと？ それともまえ？」

「前です」

「ボクは……何？」

あなたは俺の大好きな人です。

そう言いたかったけれど、言っただうなるんだろうか。俺はどうせ転校してしまって、先輩は大学に行く。年齢も違えば住んでいるところも遠くて、どうしろっていうんだ。

「準先輩は準先輩ですよ。それ以上でも以下でもない」

先輩の表情が強張る。怒っているのだ、俺がはぐらかしていることを知って。

「そういうことを言ってるんじゃないって分かってるよね、はるくん。はるくんにとって、ボクは何？」

ああ、どうしてそんなことを聞いてくるんだろうか。この人はSだよきつと。俺が答えに窮しているのだって知っているし、俺が内心言いたい事だって分かっているはずだ。それでも、彼女は俺にその問いを投げかけてくる。針山の試練のように、俺を試している。

ベッドの上で向かい合う二人。やましい状況でもなんでもなくて、緊張の糸は誰かが指で弾くだけでいとも簡単に切れてしまう。俺はその指を伸ばして、彼女を絶望させたくなんか無い。絶望なんか、させたくない。

「先輩は」

絶望なんかさせたくなかったのに、俺の心は弱かった。

「思い出をくれた人です」

「っ」

先輩が息を呑んだのと、俺の頬に焼けるような痛みが走ったのは同時だった。乾いた音が保健室に響いて、一瞬で世界の何よりも重苦しい静寂が訪れる。呼吸することなんか出来なかった。そんな資格だって俺には無いように思えたからだ。

ずっと分かっていたんだ。本当に頭の良い先輩は、俺が彼女を微妙たるものだけれど、避けていたことを悟っていた。その小ささといったら俺自身ですら気付かないほどだけど、彼女には分かっていたんだ。

だから、叩いた。

理由が分かったから、叩いた。

いたいなあ、もう。号泣しそうだよ。でも、男の意地とかそんなもので、堪えることが出来た。こういう時だけ出てくる意地なんていらぬのに。

「出て行って」

明らかな拒絶。触れただけで火傷しそうな冷たさ。その声の中にうっすらと涙が浮かんでいるような気がして、俺は猛烈に息苦しくなる。呼吸をしていないことを思い出して、俺は、すうっと息を吸い込んだ。泣かないためだったかもしれない。

「ごめんなさい」

背中を向けてしまった準先輩に一度だけ頭を下げて、夕焼けをバツクにして俺は保健室から出て行った。

4、平手打ち（後書き）

どうも蜻蛉です。

ガチです。ごめんなさいごめんなさいごめんなさい。

ここから熱血展開をお見せしましょう。それが、せめてもの贖罪というものです。

笑いか涙とか熱さとか、色々詰め込んで爆発しましょうぜみなみなさま。

5、気持ち(前書き)

後書き参照(重要)。

俺の全力描写力。とくと見よ、みたいな感じに仕上がってます。ガチもここまでくると「スイーツ(笑)」

5、気持ち

「やっちまった……」

後悔の念は荒波のごとく押し寄せる。校門を出て初めて俺は、あの場に残るべきだったんじゃないかと気付いた。引越しの時期は残念だがもう眼前まで迫っている。こんな後味の悪いまま、準先輩と別れなければならぬのだろうか。そう思うと、今すぐ戻って土下座して謝りたい衝動に駆られる。

それでも行かないのは、俺がヘタレだからだろう。先輩の背中を見たくなかった。自分があんな風にしてしまったというのに、それから目をそらすことしか出来ない。

「クソつたれじゃねえかよ、俺」

ダメだった。どんなにかっこいい自分を幻想しても、今の状況だけは打開できない。

戻ってどうするんだ？ 土下座して準先輩は許してくれるのか？ 無理だ。いかに心が寛大で有名な準先輩と言えども、俺の今までの態度を知ってしまった以上、もう関って来ないだろう。地平線の向こうに夕日が落ちていく様を見てみると、まるで自分の気持ちのようで、なんとなく夕日を掬い上げられないかと思っ手平で腕を作ってみた。でもどうしようもなく、大きくため息をついた。

思い出、だったのだ。俺は確かに準先輩が好きだったし、彼女に好かれて嬉しいと素直に思う。けれど、それもこれも、この学校での思い出なのだ。それが結果に結びつくことは無い。近々離れ離れになってしまうというのに、関係を作ってしまう何てあまりに酷過ぎる。俺にとっても、きっと彼女にとっても。

だから俺は準先輩の好意を受けつつも、それを受け入れることだ

けは決してしなかった。矛盾しているようだが、この境界線は俺にとっての理性に等しい。受け入れたら好き合ってしまう。そうなったら、俺は彼女から離れられないかもしれない。そんなものでダメになる自分を見たくないし、そんなもので泣いてしまう準先輩も見たくない。だから、適度な距離を測っていた。

言わば、悪く言えば遊んでいたんだろう。彼女を思い出のために利用したと言ってもいい。辛い未来を回避するだけならば、すぐに事実を打ち明ければ良かったのだ。俺はそうして崩れてしまう関係を恐れるのではなく、今までの時間がそこで途切れることを嫌っただけだったのだ。本当にクソだった。結局あんな悲しい背中を見せられて、準先輩とはおさらばになってしまった。

今戻って、冗談で言ったって言えば、丸く収まるんじゃないか、なんてありえない誘惑にもふらふらと心が揺れる。何度も帰路の途中で足を止め、振り返る。その度に胸を爪で引っ掻いて、諦めると自分自身に言い聞かした。

ああくそ、何が思い出だよ。こんなに惚れてるなんて自分でも思わなかった。

『出て行って』

頭の中で反響するのは拒絶の言葉。右と左の耳が塞がれて、二度と頭の中から出られなくなってしまう。短い一言が、俺の精神を掻き毟っている。住宅街じゃなければ思いっきり叫んで、アスファルトに頭を打ち付けたい気分だ。

辛い。路上で大の字になって寝てしまいたいくらいきつい。脳みそとか心臓とか吐き出しそうなくらい気持ち悪い。

考えれば考えるほど、じわじわと侵食してくる流行病のような圧倒的な心への侵入。やめてくれよもう、俺は帰って寝て、明日になったら全部忘れて楽しい学園生活を送るんだよ。

忘れる？ 忘れる。わすれる。ワスレル。わすれる。忘れる……。

「……どう考えても無理っしょ、これ」

浮かぶのは準先輩の笑顔ばかり。脳みその九十パーセントが彼女で占められている。独占禁止法に訴えて法的に排除してもらわないとこれはどうしようもない。そうなったらそうなたで、きつと拒否してしまっただろうけど。どう考えてもヘタレだ。

「ああああ！！ クソ、寝る！！」

早足になって、俺は過去とか思い出とか、折角重ねてきた色々なものを置き去りにするように自宅に帰宅した。

携帯電話の時計を見ると、九時過ぎを指していた。帰宅したのが五時くらいだから、四時間はこうして悶々としていたことになる。

寝る、なんてことは到底無理なことだった。現実逃避すら出来ないとは、ヘタレもここまでくるともう救いようも何も無い。枕は俺の呼吸でなんだか多少湿っているし、電気もつけていないから、本気でうつ病に見える。実際、鬱だ。

考えることは準先輩のことばかりだ。しかも、どうやって許してもらえるのかなんて考えてる。自分で突き放しておいて、それを引き止めるのも自分？ 馬鹿すぎて話しにならない。

本当は遠距離恋愛でも良いから、準先輩といちゃラブしたい、なんて気持ちも無くはない。っていうかかなりそっちのほうが強い。

毎日電話して、授業中にもメールして、たまに休日にかつたりして、先輩の笑顔とか、甘い声とか、やわらかい身体とか、あの純粹でストリートな言葉とか、とにかく彼女に触れていたいと思う。

でも、だからこそそれが無くなってしまふことが心配でたまらない。遠距離恋愛なんてものは必ず冷めるものだって誰かが言っていた。俺は彼女に会えない日々よりも、そういう感情が消えてしまうことがとにかく怖い。憧れからはつきりと好きとまで言えるようになったこの気持ち霧散してしまうなんてことがあるっていうこと自体、俺にとっては科学者が百パーセントと自信を持って言うノストラダムスの予言よりも怖い。

思えばハツコイってやつなんだろうか。特別中学まで女子と付き合い合ったことなんて無かったし、興味も無かった。小学生の頃も無い。幼稚園までさかのぼると自信が無いが。

準先輩はどうなんだろうか。男女ともに人気が高く、誰からも敬愛される彼女が今まで告白を受けなかったはすがない。とすれば、一人か二人くらいは付き合った人がいるんだろうか。そうしたら、俺の時みたいに、「ダイスキ」って言葉をその人に頬を染めながら言っていたんだろうか。

ああ、なんかイヤだなそれは。すげえイヤだ。

「……重症じゃね。俺？」

なんだか自分自身が面白おかしく感じてきた。どこの乙女だよ、ホント。

「ああああああ」

意味もなく、濁音付きで発声してみた。

なんだかもう頭が狂いそうだった。正しいと思ってやったことが、こんなにもハイリターンで帰ってくるなんて思っても無かったから

だ。ハイリスクハイリターン。リターンしたのはハイだけど、凄くロウな感情。

携帯電話を見つめる。オレンジ色に買い換えたばかりの携帯の液晶画面が俺の間に堕ちた部屋をかすかに照らしている。カチカチツと何をするでもなく、無意識に画像フォルダを開いたり閉じたりしていた。百件なんてまだまだ遠いアドレス帳を開いて、白鳥準の名前を見るたびに心臓を鷲づかみにされる。

今先輩に電話をかけて、謝ったら、また笑ってもらえるんだろうか……。

ダメだダメだ。何のためにこんな酷いことをしたと思ってるんだ。男なら、ここは我慢で突き通すべきだろう。弱るな、辛いのは最初だけだ。最初だけ……。

その時、その俺の汗だらけの手に握られていた携帯が振動した。

「うおっ」

驚いて取り落としそうになる。

一体こんな時に誰だよと、画面をしてみる。

そして、心臓を喉に詰まらせた。

「……準、先輩」

一定のリズムでまさに心臓の鼓動のように振動する携帯。右手の親指の先が通話のボタンに届きそうで届かないもどかしさ。取るべきか、否かとかそういう選択を迫られる前に、俺の頭は混乱で、思考は雑に混ぜられたマールブル模様のようにはつきりとした形を持ってない。

足先から頭の頂点まで、迷いという名の電撃が走り続ける。バクバクと脈打つ鼓動は血液を激しい勢いで流し続けている証拠。今なら視界が真っ赤に染まってもおかしくはないかもしれない。

緊張の一瞬だった。九回目のコールの時、俺は半ば我武者羅とも言える心構えで通話のボタンを押して、耳に当てた。。恐さと嬉しさで情けなさと、色々混じってなかなか声を出せない。

「……………」

しかしそんな均衡は一秒も続かなかった。

「ああ、繋がった。聞こえるか？」

「…………えつと、え？」

女性の声だが、準先輩の声ではない…………？俺は拍子抜けして、つい間抜けな声を出してしまう。

「私だ。保険の中村だ。分かるか？」

「あ、はい。分かります」

「よし。お前、今から学校に来い」

「は？ な、なんで？」

唐突過ぎる注文に先生でありながらタメ口を利いてしまった。いやにしても、まず九時なんかには学校に先生がいること自体が驚きだし、何故保険の先生からの電話だよ。俺なんかの持病持ちだったわけ。

「愛しの白鳥準がさっきから保健室のベッドにうずくまったままだな、帰ってきてくれないんだ」

「…………あ」

あのまま、まだ帰ってない。その事実が、俺の中から急速に罪悪感を引き張ってくる。

「家のほうにも電話しようとしたんだが、どうしても電話して欲しくないと言うから、まだ連絡もまだなんだ。で、仲の良いお前に引き取ってもらおうと思っただけな」

「ど、どうして俺には電話してもいいんですか……」

「そう白鳥準が言ったからだ。お前には連絡しても構わないってな。家族よりも恋人のほうに信用が置けるのかなんなのか知らないが、とにかく引き取ってくれ。わたしが帰れない」

「む、無理ですよ。それに俺は恋人なんかじゃ」

「それが彼氏の言うことか。恥ずかしいのは分かるが、お前それは」

「違っつて!!」

口内が沸騰していた。気付けば近所迷惑にもなりそうなくらいでかい声で叫んでいた。みつともなく、怒りでも、否定でもない、ただ単純な逃げに走った逆ギレだった。

「……す、すいません。でも、ほかを当たってください……」

急にしおらしくなって、俺は相手の返事も聞かずに電話を切った。携帯を床に放り出して、仰向けでベッドの上に倒れこんだ。すべてが冷えた。吐いた吐息が、温度を持っていなかった。

そうして交通事故のごとく、急速に理解する。

ああ、終わったんだ、と。

5、気持ち（後書き）

どうも蜻蛉です。

7話か8話で完結してしまうこの作品ですが、残念ながら第二期が決定してしまいました。どのような作品になるかは検討も付きませんし、挫折する可能性もあります。別作品扱いはしないので、更新扱いになりますが、よろしくお願いします。

6、キモチ（前書き）

後書き参照。

スイーツを舐めている人に次ぐ。「これはスイーツを読んだおかげで書けたものでもある」
いわゆる女性一人称です。キモくてごめん。

一日中泣いたことなんて無かったかもしれない。パパに叩かれてもママに叱られても、十分も経てばケロっとして遊びに行っていたというのに。今のボクはもうスタボロで、歩くこともしゃべることも出来ないから、ただ涙を零し続けていた。

保健室の白いベッドはいまやボクの内側から流れてきた色々なもので汚れてしまっている。一度保険の先生が来て、青い顔をして話しかけてきたけれど、何を言っているのかは全然耳に入ってこなかった。

今は何時だろう。どのくらいこうして泣いていたんだろう。外を見れば確かめられるのに、今はそんな気力も出なかった。お人形さんになって、一生飾られていたい、そんな気分。

ほとんどのことは分かっていた。はるくんがボクに少しだけ、本当に少しだけ距離を置いていたこと。理由は分からなかったけれど、きつとそういう事情があるんだって、なんとなく理解はしていた。ただいつになっても分からなかったのは、はるくんの本当のキモチ。

「わからないよ……わからないよ、はるくん……」

男の子に乙女心が分からないように、女の子にも男心が分からない。

スキだと言ってくれた、初めてのヒト。

正確に言えば、ボクに紛れも無い恋をしてくれたヒト。

手紙で告白されたり、憧れから近づいてくる子は沢山いたし、自分で言うのもなんだけど、凄い人気があったんだと思う。そして、はるくんもその中の一人だった。

鬼ごっこをしようなんて言われたのは、小学生のころでも無かったかもしれない。なんでも、ボクを捕まえて言いたいことがあると

か。面白いことをする子だな、と思った。だからボクは突然開始の合図を叫んで、そしてはるくんはすぐにタツチしてきた。元々逃げようなんて思っていたわけじゃないけれど、まさかあんなに早く手を伸ばしてくるなんて思いもよらなかった。

そうして、告白された。

嬉しかったのか、そうでなかったのか、そのころは分からなかった。やっぱりほかの子たちと同じ、憧れから告白してくる子だと思っていたから。

でもはるくんだけは、鬼ごっこなんて子どもだましみたいな方法で告白してきたから、ちょっとだけチャンスをあげようかな、なんて思って、ボクは自分が鬼になるって言い出した。その時の呆けたはるくんの顔といったら、面白いことこの上なかった。

それから、一年間、はるくに気付かれないようににはるくんを見てきたんだ。授業中から昼休み、帰る時も見えてきた。

はるくんが、ほかの子と違うな、と思ったのはそのころだった。憧れの先輩に告白をした、なんてことを話のネタにするようにして言いふらす人は少なくない。そういうことをする人がいるから、自然と『高嶺の花』なんて似合わない言葉を当てられてしまったし、誰とも付き合わないんじゃないかなんてうわさも流れた。

でもはるくんは待っていた。時々ボクの姿を探すようにきよるきよるとしていたけれど、諦めずに待っていた。一年間、そんなに長い時期を待たされても、待っていた。

興味を持った。うん、すごい気になった。

三年になって、いろんなことをやってみた。急に抱きついたり、自慢でもあった胸を押し付けてみたり、とにかくありとあらゆる方法でいじめてみた。でも、その度にはるくんはやけに冷静で、なんだから軽く流されているような気がした。

もう　ボクに興味がないのかな……。

無性にそれがイヤだった。そう考えてしまうと苦しかった。だから、ずっと忘れないようにと、ボクはいつの間にか必死になっては

るくんにくつついていた。

でも分かった。彼がボクを紙一重で避けていること。襲われても文句は言えないくらいのことを毎日していたのに、彼は一切ボクには触れてこなかったし、いつだって軽いギャグでその場をやりきっていた。

こころの奥底で、朱色の感情が騒ぎ出していた。

純粹でもあったし、汚くもあった。ボクは知らないうちに『好きだと言われた彼に好かれようと必死だった』。

突然生えてきたネコミミに勇気をもらった。今日のボクは違うんだぞと意気込んで、朝ははるくんにあタックした。下着だっていつもより派手で、力を入れて来た。でもやっぱりはるくんは笑顔をくれるだけで、言葉をくれない。

おかしいな。

思わず笑ってしまう。ひうつ、と喉が音を立てるだけだけど、泣いているんじゃない。

『思い出をくれた人です』

泣いているんじゃないのに、涙が止まらない。

自分のやってきた必死の行動が、はるくんにとっては全部思い出でしかなくて、じゃあボクはなんのために彼に好きになってもらって、なんのために好きになったのか分からない。これが自然に芽生えた感情だとしても、卑怯だ。あふれ出してしまった想いを誰も受け止めてくれなくて、底を尽きるまで流れ出そう。止まったと思っていたものが、再び堤防を破ってきた。

シーツを頭から被って、思いつきり歯を食いしばって、それでも止まらないから、自分の不甲斐無さに泣いた。

どうして、どうしてボクは笑ってあげられなかったんだろう。

辛いのは、きっとはるくんなのに。

そんな時、静かで冷えた世界を壊すように保健室の扉が開く音が出た。一瞬はるくんかと思つて、ボクはシートから勢い良く頭を出した。

「よっ、涙は枯れたか？」

でも、そこにいたのは保健室の中村先生だった。男勝りの気丈の持ち主で、男女共々から人気がある女性の先生。保健室なのを良いことに、煙草を啜えている。

「帰らないつもりか？ 残念だが、うちの学校では寝泊りは許可してないぞ。気が済んだならさっさと帰りな」

「……」

「ん。まあ、冗談だ。あたしもそこまで鬼じゃないよ。さっきお前の親御さんから電話があつてな、早く帰すように催促はされてるんだ。でも、その様子じゃきついだらうね」

先生はこつちに寄つてきて、ボクが身体を丸めているベッドの横に腰掛けた。

「学校の華がこんなになつちまって、そう易々と帰せんわな。あたしも保健室の先生なんだし、言いたいことがあるんなら聞いてやるよ。誰かさんの代わりに、だけどな」

そう言つて、先生は頭の上にはんつ、と手の平を置いて撫でてくれた。細くて、長い指が髪の毛に絡んで、頭のとっぺんから先生の優しさが伝わってくる。曇り空だったところの奥が、小さい木漏れ日を先頭にして、だんだんと晴れ渡つていくよう。

まだどこかでつつかえていたタガが外れた。奥底に眠っていたキモチというキモチが、洪水になつて溢れ出す。

「せ、せんっせえっ……イヤだ、イヤだよお、はるくと、お別れ
なんかしたくないよおっ……!!」

優しさに甘えるように、先生に抱きつく。枯れたと思ってた涙
はまだまだ出てきて、いつしか世界が自分の涙で埋まってしまっ
んじゃないかと思うほど。その涙で、はるくんをさらっていけたらど
んなに良いだろうと思った。

先生はネコミミに疑問も持たずに撫で続けていてくれる。ボクの
言葉も、止まるところをしらない。

「すきでっ……ううん、だいすきでっ、それで、それでっ」

「うん」

「だからっ、きらわれなくなくてっ、いっぱいスキって……」

「うん」

「でも、でもはるくんは……っ、思い出だっただって……っ」

「うん」

「だいすきなのに、ひどいこと……っ、はるくんが、すきな
のに」

「うん」

「おわかれっ、したくない……っ」

ああ、馬鹿だな、お前は。

「……え？」

そんな声が聞こえて、ボクは顔を上げた。そこには先生の澄まし
た顔があつて、何もかもを見透かしたような目で、こちらを見つめ
ていた。

「なら何故追いかけない。何故その泣き顔をあいつの前で見せてやらない。ちっぽけなプライドか？ 年上の尊厳か？ そんなもんないだろうが。だったら、追いかけるって」
「でも、もうあわせる顔も……」

先生はボクの口を指でそっと塞いで言う。

「いいか。恋愛ってのは永遠に終わらない鬼ごっこのようなものだ。どちらかがどちらかを常に追いかけている。逃げてしまわないように何度も捕まえている。男も女もクソみたいな生物でな、追いかけて捕まえていないと、すぐにどっかにいつちまう。そうだろう、お前も最初は追いかけてられている立場だったはずだ。それが今回、またまお前が鬼になってるだけ。どちらかが追うのを諦めたり、鬼ごっこを終わらせたならそれで、はいおしまい。それがお前は嫌なんだろう？ だったらやることは一つじゃないか」

思い出すのは、あの日の言葉。鬼ごっこを始めようと言った自分の言葉と、頷いた彼。

何を馬鹿なことをしていたんだろうか。自分で勝手に好き合っていると思い込んで、彼に迫って、それで自己満足して。彼は今でもずっと、約束を守って逃げているというのに。ボクにも追いつけるような、ゆっくりとした速度で、前を走っているというのに。

鬼ごっこをやめようとしていたのは、自分自身だった。
いつか言ったはずだ。

『キモチが届いたかどうかを判断するのは、はるくん』だと。

「……」

火が灯った。波は穏かな海のように。木漏れ日は一気に広がり、太陽になった。

「九時だからな。明日朝一にでも……」
「行ってきます」

ベッドから飛び降りて、真っ赤になった臉をこする。

「お、おい……」

「先生」

決めたんだ。このキモチを、朝日を拝むまでしまっておくことなんて出来ない。今すぐにもぶつけてきてやる。もう二度と逃げられないくらいに、全力で。

「恋する乙女は、好きな人のためなら火の中水の中森の中、どこにだって行きます」

ボクは走る。もう絶対逃がさない。

6、キモチ（後書き）

どうも蜻蛉です。

キモくてごめん。でも、全力でした。

それ以外に言うことは無い。あるとすれば、あと二話だ。

7、鬼ごっこ(前書き)

後書き参照。

Q「あなたはコメディ小説家ですか？」

A「本文参照」

……正直悪いと思ってる。でも後悔はしてない。きつと熱いんじゃないかと信じてる。過信だけど。

夜空を駆け抜ける音がする。白鳥準は体面も気にせず、ただ全力で恋情を向ける相手の下に走っていた。たったの一度も止まりはしない。距離にして自転車で二十分はかかるだろう道のりを、一心不乱に全力疾走している。息が荒くなり、顎が上がり、もつれる足に鞭を打つ。既に疲労を超越し、彼女の身体はハイな状態になっていた。

午後十時の気温はかなり低い。寒空の下を疾走する彼女を市民は怪訝な目で見ていた。ペースの全く落ちないスピードで歩行者の横を通り過ぎていく。その姿を馬鹿にするものはいない。注目しつつも、彼女の切羽詰った表情に気圧される。心優しい主婦は、その後姿を見て「頑張れ」と小さく心の中で呟いた。

国道高速道路が近くにあるこの地域では、信号待ちが酷い。四車線の道路が彼女の前に立ちふさがり、運悪く信号は眼前で赤になった。流石の彼女も法は犯せない。自分にもっと勇気があって、無茶できる自信があったならばと、やり場の無い憤りを自身に叩きつけた。運搬用のトラックが数台過ぎ、彼女にとって永遠とも思われた時間から解放される。普段通りの人並みなのに、今では渋谷スクランブル交差点を彷彿された。

白い息が吐き出される。耳の奥でドクンドクンと血流が脈を打っていた。水が飲みたい、素直に彼女はそう思う。しかし生憎と財布は持ち合わせていないし、そんな暇も無かった。

自動販売機の前を通りかかったとき、クラスメイトと出くわした。無視しようと思ったが、向こうから声をかけてきたので足踏みは崩さずに短く、用件は何だと聞いた。その感極まる状態に心打たれたのか、クラスメイトは自動販売機から一本のスポーツドリンクを購入し、彼女に手渡した。驚いた顔をして受け取ったが、すぐに笑顔になり、「ありがとう」と残して走り去っていく。クラスメイトは

唐突に自分の彼氏と連絡を取りたくなって、携帯電話を取り出した。遠い。はるかに遠い。

彼の家にたどり着くまでの道のりに、一本の長い坂がある。市立の小学校に通う生徒たちはここを通って通学する。かくいう彼女もよくこの道は通った。自転車で遊んでいたときなどは、よく心臓破りの坂と、ベタな名前をつけていたものだ。この急な坂は、彼女らの小さい頃の遊び場でもあったのだ。

しかし、こうして心臓が跳ねている時、下から見上げたその坂は黄泉へと続く道とも思われた。こんなものを全力疾走で駆け上げられるのは陸上部くらい。女子の身体である彼女には到底無理な話だと、専門家は笑うだろう。

だが、それでも彼女は止まらなかった。街灯がスポットライトのように彼女を照らす。汗で濡れた頬に髪の毛が張り付き、食いしばった唇に塩味のする液体が流れ込んでくる。ブレザーもブラウスも脱ぎ捨てたかった。彼女の感情だけではなく、れっきとした温度が体力を蝕んでいる。唾液が乾き、のどにべったりとしたものが粘りつく。しかし飲み込む余裕も無く、夜の空気を吸い込んで辛さをごまかした。

坂の中盤、突如足の側部に痛みが走った。学校指定の革靴は走るには向かなかった。彼女の足は靴下の下で靴擦れを起こし、真っ赤に染まっていた。雄たけびにも似た舌打ちをして、彼女は靴を脱いで手に持つ。アスファルトのごつごつした感触が感覚を奪っていく。痛みには涙を流しそうになるが、まだ早い。涙を流すのは、きつと先だと思った。

終盤に差し掛かった頃、彼女の肺が大きく悲鳴を上げた。視界が点滅し、一瞬にして彼女の意識をもぎ取っていかうとする。ぜいぜいと鳴る自分の息は他人のようで、どうでもよかった。しかし、彼女の身体は意志とは逆に崩れ落ちる。いくら運動神経の良いもので、全力疾走を続けていれば身体も悲鳴を上げよう。もう目の前に坂の執着地点はあるというのに、彼女は地面に手を付いてしまった。

額から滴る汗を見て思い出す。鬼ごつこのことだ。

鬼ごつこは相手を追いかけている途中で休憩するのはタブーだ。相手を捕まえるにはペースを守りながら、同一の速度で相手を追い込んでいくこと。とは言え、彼女と彼の差はあまりに大きい。こんなところでへばっていては、また距離を開けられてしまふと無性に心配になる。心臓の鼓動がしきりに高鳴ってやまないのはそのせいもあつた。そう思うと、彼女の身体は自然と直立する。

自分が男の子に恋をして、必死になっている。そのことが楽しくて仕方が無いし、切なくて仕方が無い。今すぐにでも捨てて、普通の学園生活でも送ればいいと思うこともある。彼女は温厚であり、厳格であり、何より乙女であつて人間だつた。

どうしてそんなに必死なの？ そう誰かが聞いた。

なんとという愚問だろうか。そんなものは彼女にはたったの一つしか答えがなく、それ以上になることも以下になることもない。

だつて、好きななんでもん。

心に言い聞かせてやると、強い支えになる。

彼の家はもうすぐだつた。だが、彼女の足は一步踏み出すために岩を動かすほどの労力を必要としていた。心なしか頭も重い。冷たいはずの夜風が熱風に感じるほど、肉体は熱を持っている。

でも、それが心地良い。分かるのだ、自分がどれだけ彼のことを慕っていて、それに情熱しているのかが。

そうして彼女は、それに酔いしれるように身を横に……。

「おい！ しつかりしろ！」

途切れかけた意識が突然の一声によつて首をもたげる。ふらついた身体が誰かによつて支えられるのを彼女は感じた。一瞬彼かと思つたが、ふと見上げてみれば、それはこの夜道を追いかけてきた保健室の先生だつた。

「ったく。青春するのは構わないがな、倒れるなら止めちまえっての」

女性のくせに本当に男勝りな言葉を使う。しかし、荒い言葉からはどれだけ心配していたのかが垣間見れる。嬉しく思う一方、反論したい部分があった。

「倒れるくらいが……ちょうど良いってボクは思います」

先生はしばらく呆けたように彼女を見つめていたが、ため息を漏らすと、自分が乗ってきた自転車を指差した。

「いつちまいな、馬鹿野郎」

やっぱり無理なんだよ。

そう呟いた彼は、もう立ち上がっていた。六畳間の部屋の中心で、自身を奮い立たせている。迷いはあるし、情けなさもある。渦巻いているのは後悔も含めて、考えれば考えるほど駄目なものばかりだった。

しかしそれでも彼は心に決めたことがある。彼女に謝ろう。そしてまた一緒に馬鹿やりましようと言おう。朝から晩まで悩んで、結論がそれだった。

一度決めたことを曲げるのは男じゃないと思う。あそこまで彼女に悲しい顔をさせておいて、何を今更とも思う。だが、押し寄せる後悔の念は彼を突き動かすには十分すぎるものだった。何が過ちなのか確かめることもしない。とにかく、今の安心がほしかった。

壁に吊るされたジャケットを制服の上から羽織り、机の上にあった財布をポケットに入れた。彼女は学校にいると先ほどの電話で分

かっている。連絡からまだ数十分ほどしか経っていない。もしかしたら帰ったかもしれない。でもまだいるかもしれない。そんな希望が、彼を我武者羅にしていた。

飛び出すようにして家を出る。夜は不気味に静まり返っており、駆け出すには十分な環境だった。

不安も何もかも、突き破ってやる。

学校までの道は約二十分程度。自転車を使い、ショートカットを使えばすぐにでもたどり着けるだろう。彼は鍵を奪うようにして掴み、車庫に入れられたマウンテンバイクに跨った。久しぶりの感触に尻が浮つく。相当なスピードを出す、ヘルメットもつけない。心の安心が欲しい彼にとって、身の安全は頭に無かった。

心臓破りの坂の途中を横に曲がる。くだりのスピードは十分。ハンドルを切るのに身がすくんだ。ペダルに思いつきり重心をかけ、自転車が抵抗を見せなくなるまで力を込める。ギアを全開まで上げる。急ぐ気持ちだが、ギアにかかっていく。

待っててください。準先輩……。

自転車を手に入れた彼女の行動は早かった。もう目前まで迫っていた彼の家にすぐたどり着き、震える手でインターホンを押す。彼女の心情とは裏腹に、実に軽快な音が鳴った。

彼の母親が出てきた。化粧つきの無い、若い人だ。自分も親になったらこういう人になりたいなと思った。

「あら白鳥さん。こんな時間に、はるになにか用？」

「えっと、と、とりあえずはるくんを……」

はやる気持ちが抑えきれず、ついせつかちになって催促してしまう。しかしそれに母親は気を悪くした様子は無い。無いが、おかし

な様子だった。

「ごめんねえ。さっきあの子どこかにでかけていったのよ。まったく、もう十時だっていうのに」

「で、でかけたんですか？」

「ええ。ついさっきね」

なんとという不運。入れ違いになったのだろう。いや、彼が何を目的として外出したのかは分からないが、自分がここにたどり着く寸前、彼はまた逃げ出した。鬼ごっこはそう簡単に終わってくれないようだ。

「どこにいったか、分かりませんか？」

「うーん。マウンテンバイク使ってどこかに行ったみたいだけど……」

それでは何の情報にもならない。近場だろうが遠場だろうが、使うときは自転車を使う。

いまや心臓はポンプと形容しても過言ではないほどの振動をしている。追いかけるとしても、そろそろ限界が近かった。自転車を使っても体力は使う。楽になるだけで、今の容態は改善されない。

息が詰まるような気分だった。

一度立ち止まってしまったせいで、足は地面に張り付いたように動かない。今にも身を投げ出して眠ってしまいたいくらいに辛い。眠いし、だるいし、何よりもここまで頑張ってきて成果が得られなかったことに精神が堪えていた。

「はるくん……」

色々な想いがある。でも今は、とにかく泣きたい。

辛い。辛いのだ。想いが届かないことが辛い。

彼は強い。逃げるにおいては、少しは手加減が欲しいくらいに強い。あれだけ色仕掛けをして襲ってこない男子がいるなんて思いもなかった。純情少年なんて、幻想だと思っていた。

彼女は間違えた。鬼ごっこという競技を果てしなく甘く見ていた。それは自分に自信があったからでもあり、彼を舐めていたからでもある。そのツケが回ってきたのだ。

人は結局、「好き」の気持ちだけでは何にも成立しない。そんなもので鬼ごっこが成立するほど、恋愛というものは甘くなかったのだ。

……行こう、まだ終わってない。

午後十一時を回った。出歩く人もちらほらといった感じになってきて、静かな夜は完全な静寂へと帰ろうとしている。

彼は校門までたどり着いて足止めを食らっていた。あろうことが校門が閉まっている。当然といえば当然だが、固い決意を掲げていた彼にとっては拍子抜けする出来事だった。

「どうすりゃ良いんだよ……」

空に向かって空虚に呟く。明日になっってしまったえば、彼女との間に気まずいものが出来てしまう。そうなる前にどうにかしようと思つて来たというのに、とんだ神の悪戯だと思った。

校門に背中を預けて、身体力を抜いた。白いため息が出て、空に消えて行った。

待てばいいのだろうか。それとも走れば良いのだろうか。

まだ手は残っている。彼女の家の前で待ち続けていれば、いつかは絶対会える。しかし、十一時を過ぎた今の時間にそんなことをす

れば、不審者通報を受けかねないし、何より彼女に迷惑がかかりそうで恐かった。結局自分はそういう現実から逃げてばかりだな、と自嘲の笑みを知らずに浮かべていた。
待つか。走るか。

「……いや、考えるまでもないつしょ」

決意を胸にマウンテンバイクに跨る。まだまだ心は折れていない。ヘタレである自分を叱咤激励するように、近所迷惑も考えないで大きく雄たけびを上げた。

まだ、やれるぞ、と。

眼前二百メートルも無い。保健室の先生は徒歩で学校に帰っている途中、前方から大きな叫びを聞いた。もう校門も見えている。近くにあった街灯が、自転車に乗った男子生徒の姿を映し出した。

「なんで……あいつが」

絶望するような気分だった。加えていた煙草をぼろりと冷えた地面に落としてしまった。しかし視線は以前彼に向けられたまま。やけに意気込んで走り出そうとする彼に、先生は声の一つもかけられなかった。

家で引きこもっているんじゃないの？

彼女を悲しませた自分に失望していたんじゃないの？

様々な思考が巡る中、追撃するように先生の後方から車輪の回る音がした。勢いよく振り返れば、それは先生が応援する彼女の姿だった。猛然とペダルを漕ぐ姿は圧巻に値する。力強い、鬼のような激走だった。

そして前方、彼はそんな彼女に気付いた様子も無く、無常にもペダルに足を置いて走り出してしまふ。

鬼ごっこだ。

唐突にそう思った。そして次の瞬間には、先生は叫んでいた。

「白鳥いい！！ 死ぬ気で追えええ！！」

彼女の耳に届いたかどうかは分からない。だが、恐ろしい速さで横を通り過ぎた彼女の表情を垣間見たとき、先生は無条件で安堵した。

傍から見れば実に滑稽だ。一組の男女が死ぬ気で鬼ごっこをしている。どちらも切羽詰った様子で、まったく速度を緩めようとしていない。一つのレースを見ているような気分にもなる。それほどまでに彼らは真剣で、純粹だった。

彼女の家の近くまで差し掛かった、曲がり角。彼のマウンテンバイクは捨てられたゴミにつまづいて大きくスリップした。自転車の後輪が大きく上がり、妙な浮遊感に襲われるのを彼は感じた。

あ、やばい。

迫った壁を避けることも出来ず、激しい衝突音だけを残して激突する。猛烈な痛みと熱さを頭に覚え、彼は身体をぐったりを横たえた。

足も動かない。手も動かない。瞼も開けられない。呼吸も苦しい。分かるのは、アスファルトの冷たさだけ。

「っ！ はるくん！」

涙の混じった音が聞こえたかと思うと、その冷たさの中に温かさが入り込んできた。

ああ、馬鹿だな俺は。

こんなにも、こんなにもあたたかいじゃないか……。意識が落ちる。

最後に見たものはなんだったか。彼女の頭には歪な形をしたシミは生えておらず、代わりに小さな人の耳が寒さで真っ赤に染まっていた。

ちきしょう。いてえなあ、いてえよ心が。

彼は無責任に願った。

目覚めた時、どうか彼女が笑っていますように、と。

7・鬼ごっこ(後書き)

どうも蜻蛉です。

コメディ小説ってなんでしょか。東の方の都市伝説だった気がします。

いえ、申し訳ないとは思ったんですが、あれですね、かかっていたBGMに合わせてノリノリで書いてたらこんなことになってしまいました。満足はしていただけないよねー。だって地の文章ばっかだもんねー。コメディ小説家として失格だよねー(泣

うう……ギャグとエロは第二期に持ち越します……。

8、太陽の子

俺内部だけでのギネス記録の更新。一体何の陰謀あつてか、一日で三度気絶するという滅多に遭遇できないイベントとのご迷惑な出会い。

第三話、知らない天井。二度ネタは受けねえって。

「気付いたか？」

大分落ち着いていたせいか、突然の呼び声に驚いた。声のしたほうを首だけ向けて見ると、うちの高校では有名な男勝りな保健室の先生が椅子に座ってこちらを見ていた。

ついでに部屋を見回した。どうやら気絶した後、ここに連れて来られたようだが……随分と可愛らしいお部屋でした。やけにピンク色が貴重なものが多い。カーテン、ベッドシート、じゅうたんがそれに当てはまる。頭上と学習机の上には溢れそうなほどぬいぐるみが飾られている。なんとなくか、創造の世界の女の子の部屋をまんま具現化したような感じだ。少なくとも先生が住む部屋ではない。保健室、なんてのもありえないだろうから、と考えていると結論はすぐに出る。

というかだな、実は言う俺は今まで思考を巡らすことである種の現実逃避をしていたんだ。状況を説明すると、実に至極当然のことだがベッドに俺は寝かされているわけだ。こう、クラクラするよな女の子の香りがするのも今までスルーしていたことなんだが、それよりも俺の左手方向に超近接状態で何か人間サイズの物体があることが、もつとも俺が逃げたい現実だ。

「人前で恥ずかしげも無く添い寝できる彼女を持っていて良かったな」

むっっちゃ恥ずかしいんですけどおおおおおおお！！

さて、冷静に考えてみよう。俺の肘に当たっているブツは気にしないことにして、あとふともも付近に当たってるブツも放棄して、あと肩らへんに乗せられているブツもスルーして…… あああ、寝息が、寝息があ。

「素数を数えろ、素数を」

先生がにやけた顔でそう言ってくる。

しかし一理あるぞ。素数だな、素数。

1、2、3、4、5……。素数ってなんだ。九九の1段だっけ。こんなんで煩惱退散できるのかがすげえ疑問だぜ。

「ていうか先生、見てないで助けてくれるとありがたいんですが」

「自分でどかせばいいだろう」

「いやそれがですね、なんか俺のありとあらゆる左側部分に何か当たって迂闊に動けないんですよ」

「気にするな、お前の幻想だ」

「勇気が出てきました」

もはや何事も無かったかのようにそつと準先輩の腕と足を引き剥がし、上体を起こした。右肩に異様な鈍痛を覚えて、顔をしかめた。

「極度の疲労と軽い脳震盪だ。後遺症は無いだろうが、まあ多少頭がふらふらしたりするだろう。二日くらいは安静にしているといい。

こじこじ」

「こじこじで!？」

「文句でもあるのか」

「理性が保ちません」

「良いじゃないか。既成事実でもなんでも作ればいい」

あんたそれでも保険医かよ。

「まあそれじゃあ、あたしはご両親と少し話してくるから」

「あ、はい」

そういうと先生は部屋を出て行ってしまった。話ってなんだろう
か、部屋を借りていることを説明しに行くのか。

……違うな。気をきかせてくれたんだろう。きっと先生は俺らの
事情を結構知っている。少なくとも教員であるから俺の転校のこ
とは知ってるだろう。そして、どうして準先輩があれだけ必死だっ
たのかも。ここに運んでくれたのも先生だろう。横で静かな寝息を立
てる準先輩。彼女には俺にいたい事が山ほどあるのだろう。俺は
それを聞く義務がある。だから先生はこの部屋を出て行った。

ということは全部違って、俺が上半身半裸なのを見ていられな
かったんだろうと推測する。今までこの肌に直接準先輩が触れてい
たと思うと……ああ、官能的過ぎて想像できない。

とりあえずベッドの近くにある椅子の上に置いてある俺のシャツ
を着ようと、ベッドを出ようと片方の足を出した。

「待って……」

今にも消えてしまいそうな弱々しい声。ベルトを掴んだ力は重力
を感じないほどに軽く、そのあまりにらしくない先輩の姿に俺は止
められずとも動きを止めてしまった。彼女の海の瞳が俺を射てくる
ぐさりと刺さるような苦しさ、ちくちくと突くような愛しさに俺
は困惑した。彼女に触れたいと願う左手が動く前に、俺は感情を歯
で噛み砕いた。

「どこに、行くの？」

「どこにも行きませんよ。今は」

「いいよ、どこかに行こうとしても」

俺は準先輩の言う言葉に耳を疑った。でも、言葉とは裏腹にベルトを掴んでいる手は少しだけ震えているのが伝わる。けれど、強がりにも見えなかった。

「どうせ、逃げられないもん……」

そういつことかと、俺は理解する。理解した上で、言う。

「こんな弱つちい手、すぐに外せますよ」

「無理だよ。はるくんには」

「俺が準先輩に同情して、外さないとしても？」

「それもある。でもそれだけじゃない」

そうだ、それもある。今準先輩が俺のベルトを離しても、俺はきつとこの部屋から逃げることは出来ない。彼女の檻が俺を捕まえてしまっている。身動きなんて取れるわけもなかった。

「力づくで、逃がさないつもりですか」

「それもある」

「また襲い掛かってくるんですか」

「それもある」

「じゃあなんなんですか」

準先輩は寝ていた身体を起こして、俺と正面から向き合う形でベッドに座った。彼女は煤けた制服のままだった。お世辞にも整っている服装とは言いがたく、どこかで乱暴に扱った形跡が見られた。

よれよれの皺だらけになってしまったそれは、嵐を浴びて倒れてしまった花。

しかし、準先輩の目は見るものを射抜くものがあつた。

思わず震える。萎れた花に身体を包んでいたのは、しっかりと根を張る蒲公英か。それとも天に強く伸びる向日葵か。雨にさらされた程度で元気を無くしそうな俺は、ただそれを目の前にして萎縮するしかなかった。

彼女の小さく、引き締まった口が開かれた。

「はるくんのこと、好きだから」

なんだって？

「はるくんのこと、大好きだから」

……っ。

思わず目を逸らしてしまうほどの言葉の強さに、俺は感情を強く殴られた気分になる。

嘘だ。その言葉にそんな力はなかったはずだ。何度言われたか数え切れない。

好き、大好き。まるで茶番にもならないご機嫌取りの感情。俺たちは辞書で調べて自らの感情の形を見つけて、それを使っていただけ。

俺は彼女が好きで、彼女は俺が好き。そこには意味があつても、心が無い。俺が抱くこの複雑難解に入り組んだ迷路のような感情は、そんな言葉で表現されていいものじゃなかったはずだ。文にしたら止まらなそうなの歯止めの利かない洪水を、たったの「すき」という二語で表せていいものじゃなかったはずだ。

「こつちを向いて」

準先輩が俺の頬を両手で掴んで、無理矢理向かせる。
彼女のガラス細工のような瞳も澄んだ川のような言葉も、すべて
まとめてキモチという名の弾丸だった。

「はるくんが逃げようとしてるのは、ボクからじゃない」

「……え？」

唐突に鬼ごっここのくだりを思い出して、裏返った声で聞き返した。

「はるくんが逃げようとしてるのは、鬼ごっこ自体からだよ」

先ほどの意志に満ちた眼光が突然弱まる。

「ごめんね。ボクがなかなか捕まえなかったから、疲れちゃったんだよね。はるくんが必死に手招きしてるのに、ボクが気付かなかつたから。ごめんね、本当にごめんね……」

色を失った目には大粒の涙を浮かべ、言葉より、行動より重い気持ちはタツクルで俺に伝えてくる。

血を吐きそうなくらい強烈だった。なんという重さだろう。彼女の肩越しから流れてくる淡く甘く苦く鋭く大きいものの数々は、まるで爆弾のようだった。

「だからね、はるくん。もう、止めよう？」

「……何を？」

「鬼ごっこだよ」

鬼は俺をしつかりと掴んだまま、そう言った。

「だって疲れるじゃん。逃げて、追ってさ。イヤじゃん、逃げるのもっと近くにいたいのに、もっと感じていたいのに、どうして逃げなきゃならないのさ。馬鹿じゃん、それ」

鬼ごっこをすることで、俺は何を求めていたのだろうか。晝差し込む教室で、一体俺は何を考えていたのだろうか。まさか、告白に緊張して変なことを言ったわけではあるまい。俺は各個たる意志を持って準先輩に声をかけたのだ。

「ボクははるくんを捕まえた絶対の自信が今はある。なら今度の鬼ははるくんで、ボクは大好きなはるくんから逃げなきゃならない。どうして？ どうしてそんなことをする必要があるの？」

どうしてだろうか。あの日、俺は彼女にどうして鬼ごっこをしようと言ったのだろうか。俺の憧れで、恋情を寄せていた準先輩。俺は、彼女を追いかけていた。ずっと、ずっと追いかけていた。心臓破りの坂なんて下り坂と変わらないと思えるほどに、心臓を高鳴らせていた。

そうして、あの夕焼けの下で彼女をタッチした。

「はるくんは……ボクのこと、好き？」

「……もちろんです」

それだけはその日から何も変わらない。考え方も、状況も変わってしまったけど、その気持ちだけは心の奥に、誰にも触れられないように置いておいたんだ。

「なら、それでいいじゃん。ボクははるくんが好きで、はるくんはボクが好き。それ以上に何を望むの？」

「……互いが好き合っけていても、いずれはきつと何かで仲違いして

しまつような気がして、怖いんです」

臆病だなあと、準先輩は視線を逸らしもしないで、悲しそうに笑った。

「そんな未来のことなんて、未来で考えればいいんだよ」

「でも近い未来、俺はここから遠い場所に行かなきゃならない。そうになったらどうするんですか？」

怖い。耳を塞ぎたくて仕方が無かった。でも、準先輩の温かな手がそれを許してくれない。

「逃げちゃ、ダメ」

彼女は再三、そう俺に言う。

「逃げちゃ、ダメなんだよ。はるくんの鬼ごっこは、最初からずっと、そういうものから逃げるために用意された勝手な口実だったんだよ」

……本当にそうだったか。俺は彼女との関係が壊れることを怖れて、そんなことを言ったんだろうか。

「……違う」

自分でも驚くほど乾いた声が出た。準先輩にはまるで魂のこもっていない空っぽの否定に聞こえたかもしれない。けれども、俺はその否定に力を込めた。

「俺はそんな難しいことを考えて準先輩に告白したわけじゃない！

「！」

怒鳴り声になった。女の子が一人暮らすには十分なほどの大きさの部屋に、埋め尽くすがごとく声が響き渡る。下の階で先生や準先輩の親が驚いているかもしれない。それでも、叫びたかった。

「俺は準先輩に好かれないと思ったただけだ！ でも、自分を見ていて欲しいなんて恥ずかしい言葉も言えないから、だからっ」

「知ってるよ」

上から優しくふたをするような抱擁感のある声。俺は思わず黙り込んでしまった。

「ずっと見てきたんだもん。はるくんのことは、もうなんでも知ってる。今まで分からなかったはるくんの気持ちを知って最後。ボクははるくんの全部を知ってる」

掴んだ頬を寄せて、準先輩は俺を抱きしめた。

「だからもういいんだよ。追いかけてこなんて止めて、ボクと一緒に、ね？」

「……俺は、引っ越しますよ？」

「大丈夫。すぐに会えるから。毎日メールもするし、電話もするから」

ああくそ、泣けてくる……。

なんなんだろうかこの人は。温かすぎて溶けてしまいそうだ。何を悩んでいたんだろうか。彼女のような太陽を放り出して、どこに行こうとしていたのだろうか。

戻ってこよう。ここは、良い場所だ。

「準先輩」

「なあに？」

「俺と、付き合ってください」

間はほとんどなかった。

「これからずっと、よろしくおねがいしますっ」

それは、太陽の子を思わせる最高の笑顔だった。

季節は冬。都会は寒いだけで滅多に雪は降らない、なんていうのは昔の話だ。異常気象も相まって、今年は雪がかなり降った。

しかし、どうやら俺の門出には出迎えてくれなかったらしい。寂しくも思うが、交通を考えれば空気を読んでくれたとも言えるだろう。

俺は現在父親が運転する車の中にいた。首都高速に入り、もう景色は見えない。夜中だったら豪華なイルミネーションも見れただろうが、昼間の都会の光景なんて面白くもなんともない。連なるビル群も見慣れ、稀に姿を現す東京タワーやレインボーブリッジに親が反応するくらいだ。

後部座席から、俺はなんとなくその光景を目に焼き付ける。田舎のほうに引越す俺ら家族は、もうこんな軒並みを見ることなんてないだろう。

この光景のどこかに、準先輩が受験する大学がある。そう思うと、

見るのも苦じゃない。

準先輩は成績も優秀だったために、大学受験には苦勞しないそう
だ。推薦も十分受けられるし、中程度の大学だったらそれだけで通
りそう。品行方正でもある彼女はやはり欠点が無い。俺も大変な
人に好かれて、好きになってしまったものだと思わず笑ってしま
いそうになる。

大学は既に受かったらしいが、それについての連絡は無い。特に
俺が知る必要も無いだろう。俺も彼女も新しい場所で生活をする。
多数の苦難に当たることだろうし、きっと挫折もするだろう。

でも、俺には彼女がいて、彼女には俺がついている。やれる。そ
う確信できる。

手で握っていた携帯電話がふいに震えた。準先輩とメール中だ
った。

『また会うときは、はるくんお気に入りのおびつきり可愛いネコミ
ミつけていくよー!』

……それは、冗談でもよして欲しいなあ……。

寒空の下、ちょっとした事件から始まった俺たちの鬼ごっことい
う恋愛戦記は、ここにて一度幕を下ろしたのだった。

8、太陽の子（後書き）

あとがきです。蜻蛉です。

速筆とか言っつて、なんだかんだで8話に二カ月かけたことをまずお詫びしましょう。そして、知らないうちに何故か恋愛ものになってしまったことについては、読者さま側に判断を委ねます。私個人としては、6話辺りでこの展開を持ってくるつもりだったのですが、知らない間にもうあれよあれよと……。

しかしまあ、良くも悪くも完結してしまいましたこの作品。一応第二期の予定があります。どのようなクオリティーになって帰ってくるかはまったくの未知ですが、こんな感じのクオリティーでお送りするんじゃないかと思えます。

では、変態もネコミミもどこかに置いて来てしまったこの作品ですが、ここまで読んでくださってありがとうございます。またこのような雰囲気作品でお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0500e/>

ボクっ子+ ネコミミ = 変態

2010年10月28日07時26分発行